

國學院大學文学部考古学実習報告 第44集

長野県安曇野市

穂高古墳群

2009年度 墳丘測量調査・現状確認調査報告書



2010. 11

國學院大學文学部考古学研究室

長野県安曇野市

穂高古墳群

THE HOTAKA TUMULI

2009年度 墳丘測量調査・現状確認調査報告書

2010.11

國學院大學文学部考古学研究室

緒 言

國學院大學考古学研究室では、1970年代初めの大学紛争によって中断していた考古学実習による夏季発掘調査を、1979年以来実施してきた。

これまでに発掘調査を実施してきた遺跡は、新潟県十日町市壬遺跡(縄文時代草創期)、山形県長井市北堂C遺跡(縄文時代草創期)、同明神堂遺跡(中世)、長野県木曾町小馬背遺跡(縄文時代草創期)、同柳又遺跡(旧石器時代～縄文時代草創期)、北海道今金町美利河遺跡(旧石器時代)、新潟県津南町本ノ木遺跡(縄文時代草創期)、同卯ノ木泥炭層遺跡(縄文時代)、千葉県富津市森山塚(古墳時代)、東京都三宅村中郷遺跡(中世)、同物見処遺跡(中世)の11か所に昇る。このうち、三宅村に関しては、2000年の噴火以降島への立ち入りが長らく禁止されていたため、伊豆諸島と伊豆半島を対象を切り替え、大島、新島、式根島、八丈島、下田市・東伊豆町・河津町・伊東市・熱海市で遺跡・遺物の実地調査を行った。

2009年から調査を始めた長野県安曇野市穂高古墳群は、長野市大室古墳群、松本市中山古墳群とともに、長野県を代表する古墳時代後期の群集墳である。大室古墳群に関しては明治大学その他による長年の調査によって石のみで墳丘を築いた積石塚としての全容が明らかにされており、中山古墳群に関しても松本市教育委員会その他の調査ではほぼその全容が明らかになっている。これら二つの古墳群と並び称される穂高古墳群でも過去に様々な調査が行われ、現在はすべての古墳が安曇野市の史跡に指定されて保護されているが、石室構造や副葬品の調査が主であり、墳丘そのものの調査は十分に行われてきたとは言いがたい状況にある。また、さまざまな開発によって損傷したのもも残念ながら存在し、古墳群全体としての現状を正確に把握していくことも重要な課題の一つである。

穂高古墳群が位置する松本平には千曲市森將軍塚古墳と並ぶ古墳時代前期の古墳である弘法山古墳が築かれ、古墳時代を通じて多彩な古墳文化が展開されてきた。これらの古墳文化の基盤となった集落の調査も進められている。古墳に限らず、文化財は先人達の足跡を今日に伝えるものであり、これらが内蔵している国民共有の財産としての価値と歴史的意味を正しく知り、長く後世に伝えるとともに、これらを残していくことが、現在に生きる私達のできる最良の道と考えている。

今回調査の対象としたF9号墳とF10号墳の二つの古墳は、国営アルプスあづみの公園の中であって、破壊を受けることなく現状保存されているが、正式な調査がいまだおこなわれていず、その実態は不明なままとなっている。これら2基の古墳を含む古墳群の調査が、地元の方々や公園に来られる人々がはるか昔に安曇野に住んだ人々に思いを馳せていただくきっかけになれば幸いである。

最後になりましたが、今回の調査に関して、長野県教育委員会や安曇野市教育委員会、さらには国土交通省、国営アルプスあづみの公園をはじめ、多くの機関や個人からご支援とご協力を賜りましたことを記して、感謝の意を表します。

2010(平成22)年11月1日

國學院大學考古学研究室

吉田 恵二

例 言

1. 本書は長野県安曇野市穂高有明・牧・柏原を中心に所在する穂高古墳群学術調査の記録である。
2. 本調査は平成21年度國學院大學考古学調査法(考古学実習)の一環として、平成21年8月3日から同年8月12日までの10日間にわたり調査を実施したものである。
3. 本調査は安蘇谷正彦(國學院大學学長)が主体者となり、吉田恵二(文学部教授)が担当した。現地調査は吉田および深澤太郎(研究開発推進機構助教)・中村耕作(文学部助手)が指導にあたり、朝倉一貴・中島大輔(大学院ティーチングアシスタント)の下、考古学実習生20名・特別参加生24名が参加した。また、調査にあたっては柳田康雄(文学部教授)・谷口康浩(文学部准教授)の指導・協力を得た。
4. 現地調査・整理作業においては多数の機関や個人から協力を得た。巻末に芳名を記して感謝の意を表す。
5. 実測図、その他の諸図版作成、および写真撮影は考古学実習生が主体となって行った。
6. 本書の編集・執筆は、吉田・中村の指導の下に実習生が分担協議した。
7. 個々の古墳の表記方法については、過去の調査研究に準拠して「所属支群を示すアルファベット+通し番号」で表記(松川村所在古墳を除く)し、またそれ以外に別称を持つ場合には過去の文献との整合を容易にするため、括弧付けでこれを表記した。
8. 本調査において墳丘測量調査を行ったF9号墳とF10号墳は、2基の総称として「二つ塚」の別称を持っている。そのため、どちらかを単独で表記する場合に別称を表記するのは適当ではないと判断し、また文章中で多用することを考慮して、本報告書では両古墳に限り別称の表記を省略する。
9. 安曇野市域では2005年の安曇野市発足に至るまで数度の合併・改称が行われている。1889年、市町村制施行に伴い南安曇郡東穂高村・西穂高村・北穂高村・有明村が発足、1921年に南安曇郡東穂高村が改称して南安曇郡穂高村が発足した。1954年に南安曇郡穂高村・西穂高村・北穂高村・有明村が合併して南安曇郡穂高町が発足したのち、2005年には南安曇郡豊科町・穂高町・三郷村・堀金村と東筑摩郡明科町が合併して安曇野市が発足した。本文中では、旧町村名の表記が必要な場合のみ「旧」を頭につけてこれを表記した。
10. 本書に掲載した第5図は国営アルプスあづみの公園事務所、第9図は安曇野市都市計画課より原図の提供を受けた。

目 次

緒言	吉田恵二
例言	
目次	頁
第Ⅰ章 調査の目的	(小林裕樹) 1
第Ⅱ章 調査日誌	(久我谷溪太) 2
第Ⅲ章 松本平の地理的環境	(紺谷佳奈江・坂才 瞳) 4
第1節 松本平の地形・地質	4
第2節 穂高地域の地理的環境	5
第Ⅳ章 松本平の歴史的環境	
第1節 縄文時代	(鳴海由希・矢花真紀) 8
第2節 弥生時代	(伊藤 愛・長谷川千絵) 10
第3節 古墳時代	(秋山裕志・加納大典) 11
第4節 古代	(齋藤有平・畠山伸彦) 13
第Ⅴ章 穂高古墳群の調査	
第1節 穂高古墳群の概要	(久我谷溪太) 17
(1) 研究史	17
(2) 支群構成と分類・全体数	18
(3) 支群ごとの概要	18
第2節 F 9号墳・F 10号墳の調査	21
(1) 調査地の概要	(伊藤 愛) 21
(2) 調査の方法	(伊藤 愛) 21
(3) F 9号墳の調査	(小宮美紀) 22
(4) F 10号墳の調査	(長谷川千絵・矢花真紀) 23
(5) 小結	(長谷川千絵・矢花真紀) 23
第3節 現状確認調査	(小宮美紀・佐瀬裕太) 28
(1) 調査の内容	28
(2) 調査の方法	28
(3) 調査の結果	28
第Ⅵ章 おわりにあたって	(久我谷溪太) 36
引用・参考文献	
写真図版	
発掘調査参加者・関係者一覧	
報告書抄録	

挿図目次

第1図	長野県全体図	4
第2図	松本平地質図	6
第3図	松本平周辺の自然環境	7
第4図	穂高古墳群と周辺の古墳時代遺跡	20
第5図	測量基準点の位置と座標値	22
第6図	F 9号墳・F 10号墳全体図	24
第7図	F 9号墳平面図・見通し図	25
第8図	F 10号墳平面図・見通し図	26
第9図	F 9号墳・F 10号墳周辺旧地形図	27

表目次

第1表	穂高古墳群一覧表	31
-----	----------	----

写真図版

図版1	1 F 9号墳・F 10号墳 遠景(西から)	2 E 9号墳 現状(南東から)
	2 F 9号墳・F 10号墳 遠景(北から)	図版13
図版2	1 F 9号墳 除草前(北から)	1 E 10号墳 墳丘・石材残存状況 (南東から)
	2 F 9号墳 除草後(北から)	2 E 10号墳 墳丘・石材残存状況 (南西から)
図版3	1 F 9号墳 除草前(西から)	図版14
	2 F 9号墳 除草後(西から)	1 E 11号墳 現状(南から)
図版4	1 F 9号墳 墳丘残存状況(東から)	2 E 11号墳 現状(北から)
	2 F 9号墳 石室残存状況・羨道部 (南から)	図版15
図版5	1 F 10号墳 除草前(北から)	1 F 1号墳 現状(南から)
	2 F 10号墳 除草後(北から)	2 1950年頃のF 1号墳
図版6	1 F 10号墳 墳丘残存状況(北西から)	図版16
	2 F 10号墳 墳丘残存状況(西から)	1 F 2号墳 墳丘残存状況(東から)
図版7	1 F 10号墳 墳丘残存状況(南西から①)	2 F 2号墳 墳丘残存状況(南から)
	2 F 10号墳 墳丘残存状況(南西から②)	図版17
図版8	1 F 10号墳 墳丘残存状況(南東から)	1 F 3号墳 墳丘残存状況(南から)
	2 F 10号墳 墳丘残存状況(東から)	2 F 3号墳 石材残存状況(南から)
図版9	1 F 10号墳 墳丘残存状況(北東から)	図版18
	2 F 10号墳 石室残存状況(北から)	1 F 4号墳 墳丘残存状況(東から)
図版10	1 F 10号墳 石室・羨道部残存状況 (南から)	2 F 5号墳～F 7号墳の位置関係
	2 F 10号墳 石室・羨道部残存状況 (西から)	図版19
図版11	1 E 1号墳 墳丘残存状況(南から)	1 F 5号墳 墳丘残存状況(南から)
	2 E 1号墳 墳丘残存状況(北から)	2 F 5号墳 墳丘残存状況(東から)
図版12	1 E 9号墳 現状(東から)	図版20
		1 F 6号墳 現状(南から)
		2 F 6号墳 石室残存状況(南から)
		図版21
		1 F 7号墳 墳丘残存状況(北から)
		2 F 7号墳 墳丘残存状況(西から)
		図版22
		1 F 8号墳 現状(南から)
		2 F 8号墳 現状(東から)

第 I 章 調査の目的

國學院大學考古学研究室では、毎年夏季休暇中に実施している考古学実習の一環として、2009(平成21)年度から新たに長野県安曇野市穂高地区を中心に所在する穂高古墳群を調査対象地とした。

穂高古墳群は古墳時代後期の群集墳で、安曇野の西部に位置する山岳地帯を源に東へ向かって流れる鳥川と中房川が形成した扇状地上の、標高約600m～700m付近一帯に点在している。大きくA群～H群・松川村所在古墳の各支群からなり、現在87基以上の古墳が確認されている。

県下でも大室古墳群(長野市)や中山古墳群(松本市)とともに長野県を代表する群集墳の一つであり、現存する81基が安曇野市の史跡に指定されている。明治時代の報告以来、鳥居龍蔵氏や大場磐雄氏の調査研究などによりその名は周知されていたが、土地開発や盗掘などによる古墳の消滅や破壊も問題視されていた。1960年代には大規模開発計画がもちあがったこともあり、穂高町教育委員会が1964年から1970年にかけて旧穂高町域内の古墳の分布確認調査と、確認された古墳に対する古墳名を彫った石製標柱の設置を実施し、本格的な古墳群の保護対策が取り組まれはじめた。同時期の1967年に行われた長野県教育委員会による調査では、より正確な資料整備へと進み、旧穂高町内の古墳は大きくA群～G群の7群に大別され、その大要がようやく把握されはじめた。

しかし、古墳群一帯の開発はその後年々飛躍的に増大し、未確認古墳の破壊が指摘されるなど、さらなる保護対策が懸念されていった。1975年にはF 1号墳が道路工事のため穂高町教育委員会によって緊急発掘調査されるといふ事例も発生した。これだけの規模の古墳群でありながら、まとまった学術調査がない点を考慮し、1982年には『長野県史』編纂事業の一環として、岩崎卓也氏を中心とする筑波大学考古学研究室によって一部の古墳の墳丘・石室・出土遺物の実測調査が行われた。1991年にも『穂高町誌』編纂事業にともない桐原健氏が、また同年には三木弘氏によりE 6号墳の調査も行われている。

以上のような調査以外にも、過去に何度かの調査が行われているが、研究調査主体者の視点の違いも大きく、土地開発などの影響も受け、調査年度によって古墳数に差が生じるなど、情報が把握しづらいというのが現状である。墳丘・石室・出土品を一体とした総合的な調査例もなく、古墳群全体の現状を把握する詳細な調査も1991年の『穂高町誌』編纂時以来行われていない。

これらの状況を踏まえ、当古墳群の調査研究の実施に至った。調査の目的はF 9号墳・F 10号墳の2基の古墳群の綿密かつ継続的な学術調査と、現状確認調査による個々の古墳の状態の把握を行い、穂高古墳群の歴史的意義を後世に伝えていくことである。今年度、墳丘測量調査を行ったF 9号墳・F 10号墳は、現存する古墳の中でも保存状態が比較的良好であり、現在は国営アルプスあづみの公園内に位置している。このため、今後も土地開発による破壊の影響を受ける可能性は低いと考えられる。そして国営公園という観光スポットとしての立地条件も活かすことで、周辺住民の方々にとどまらず、長野県内や全国の方々にも穂高古墳群の存在を広める最良の適地といえる。また、普段あまり一般の方々に触れることのない当古墳群の持つ歴史的な特性を、大人や子供など年代を問うことなく、肌で感じてもらえることのできる社会教育の場としてもF 9号墳・F 10号墳の学術調査は重要であると考えられる。

本年度の調査では、F 9号墳・F 10号墳の墳丘測量調査を主な内容とし、次年度以降に計画されている発掘調査計画の材料を得ることができた。同時に、E群・F群を対象として現状確認調査も実施し、過去の調査では明らかにされていない、新しい知見も得ることができた。(小林)

第Ⅱ章 調査日誌

8月3日(月)

14時40分にJR大糸線穂高駅に集合し、車で宿舎となる安曇野鐘市鳴る丘集会場（大正期の有明温泉旅館の洋風建築：市指定文化財）へ移動する。機材搬入と宿舎内の清掃終了後、ミーティングを行い調査前の最終確認をする。

8月4日(火)

全員でF9号墳・F10号墳の前で穂高神社によるお祓いを受ける。調査前写真の撮影終了後、1班と2班はF9号墳の墳丘上の清掃作業に取りかかった。同時並行で両古墳近くに測量基準点を設置し、またその標高値設定のため四等三角点「塚原」（標高650.2m）の位置確認を行ったが、埋没してしまったのか発見することができなかった。3班と4班は穂高神社御船会館・弘法山古墳・松本市立考古博物館・中山古墳群(15・16号墳)の見学を行った。

8月5日(水)

3班と4班は全景写真の撮影終了後、F9号墳の墳丘上の清掃作業を行う。完了後に清掃作業終了後写真を撮影し、新たにF10号墳の墳丘上の清掃作業に取りかかった。四等三角点「塚原」の位置が確認できないため、存在していたと推定される地点付近にポイントを1点(新「塚原」)設置し、そこから北北西におよそ1.6km離れた位置にある四等三角点「牧」(標高665.4m)との間で原点移動を行った。それと並行して公園敷地を取り囲む柵の手前にもポイントを1点設置し、昨日両古墳近くに設置した測量基準点との間で原点移動を行った。1班と2班は昨日の3班と4班の見学場所に加えて針塚古墳・松本市立博物館・松本城・安曇野市立堀金歴史民俗資料館を見学した。

8月6日(木)

全員現場で作業にあたる。早朝のうちに遠景写真の撮影を行い、F10号墳の墳丘上の清掃作業と清掃作業終了後写真の撮影、両古墳周辺域の清掃作業を完了させる。F9号墳では墳丘上にポイントを2点設置して、平板による墳丘上に散在する石の位置と外形線の測量作業を開始した。原点移動は昨日に引き続き「牧」と新「塚原」間、加えて昨日設置した柵の手前のポイントと新「塚原」間で行った。午後は雨のため作業を途中で中断し、安曇野市立穂高郷土資料館の見学を行った。また翌日から行われる確認調査に備えて、F1号墳～F7号墳とE6号墳～E8号墳の所在地を確認した。

8月7日(金)

1班・3班・4班は現場で作業にあたる。早朝のうちに原点移動を完了させる。F9号墳は昨日に引き続き平板による墳丘上の石の位置と外形線の測量と、標高の測定が可能になったため新たに墳丘の等高線測量を開始する。F10号墳も墳丘上にポイントを2点設置し、F9号





墳と同様に平板による石の位置と外形線の測量、等高線の測定を開始した。2班は確認調査を行い、F1号墳からF7号墳を踏査した。午後はまたしても雨のため作業を途中で中断し、再び安曇野市立穂高郷土資料館とD1号墳(魏石鬼窟)の見学を行った。

8月8日(土)

1班・2班・4班は現場で作業にあたる。両古墳とも引き続いて平板による石の位置と外形線の測量、等高線の測定を行う。F9号墳では等高線の測定が完了した。3班は確認調査を行い、F8号墳・E1号墳・E9号墳・E10号墳・E11号墳を踏査した。この日も午後から雨が降りはじめ、作業を途中で中止した。また同日午後には吉田恵二教授による現場での「古墳ウォッチング」が開催され、公園来場者の方々への解説と調査の報告を行った。



8月9日(日)

3班と4班は昨日と同じく両古墳の平板による石の位置と外形線の測量を行う。F10号墳では等高線の測定を完了させ、両古墳とも平板による等高線図の作製を開始した。また翌日に予定している確認調査に備え、E2号墳～E5号墳とE12号墳～E17号墳の所在地を確認した。1班と2班は森將軍塚古墳・森將軍塚古墳館・大室古墳群を見学した。



8月10日(月)

予定していた1班と2班による確認調査が早朝からの雨のため中止になり、代わりに宿舍の清掃と機材の整備・確認を行う。3班と4班は雨の降るなか昨日に引き続き両古墳の平板による等高線図の作製に取りかかり、同時に墳丘上に生えている木の位置と外形線測量も行った。午後からは雨も止んだため1班と2班が現場に合流し、作業の補助と墳丘の観察を行った。



8月11日(火)

『信濃毎日新聞』地域版に「6世紀ごろの〈古墳ウォッチング〉」の見出しで記事が掲載される(13日には『市民タイムス』にも記事掲載)。1班と2班は昨日と同じく両古墳の平板による等高線図の作製および墳丘上に生えている木の位置と外形線測量を行う。作業完了後、清掃時に刈り取った草木を指定された処理場へ運び、今年度の調査をすべて完了した。3班と4班は森將軍塚古墳・長野県立歴史館・大室古墳群・大室古墳館を見学する。夕方からは調査完了を祝って打ち上げを行った。



8月12日(水)

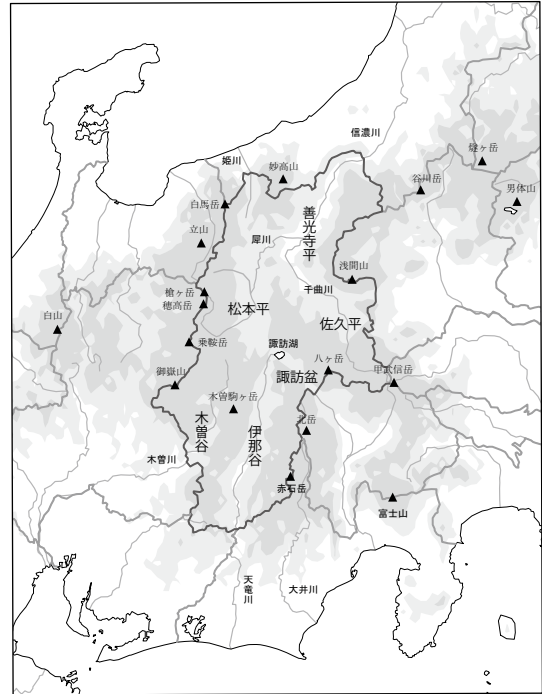
機材の点検・整備と梱包・積み込みをし、宿舍内の清掃を完了させたのち、最後のミーティングを行う。終了後、車で穂高駅まで向かい解散して帰路についた。
(久我谷)



第Ⅲ章 松本平の地理的環境

第1節 松本平の地形・地質

長野県は本州中央部に位置する内陸の県である。南北約212km、東西約120km、総面積は約13,562km²で、県中央部には北部フォッサマグナが通る。県内の地形は山地と河川によって形成されており、主要河川流域にはいくつかの盆地が存在している。松本平もそれらのひとつであり、北部の大町市から南部の塩尻市まで、ほぼ北北西から南南東の方向に幅を広めながら延びていく盆地である。松本平にはフォッサマグナの西縁を画す糸魚川―静岡構造線が通っており、西側にある3,000m級の飛騨山脈(北アルプス)と東側にある丘陵性の筑摩山地に挟まれ、安曇野市明科を底にした播鉢状の地形である。盆地を形成している扇状地は、飛騨山脈から発源するいくつかの河川によって形成された複合扇状地である。その扇状地から扇頂、あるいは扇状地を形成する河川付近に、時代を問わず多くの遺跡・古墳が発見されている。複合扇状地を形成しているいくつかの河川のなかでも、二大河川と称されるのが梓川と高瀬川である。飛騨山脈の槍ヶ岳の南側から梓川、北側から高瀬川がそれぞれ源を発し



第1図 長野県全体図

て飛騨山脈の山体を深いV字谷に穿ち、いくつかの溪流が合流して松本平に流れ出る。高瀬川は松本平に出てから、籠川・鹿島川・農具川と合流し、明科で南方から来る犀川と合流する。源流地の地質の大半は中生代の花崗岩であり、また流域の堆積物は、玉石混じりの砂礫層、砂礫層、粘土混じり砂礫層の順に重なっている。

梓川は南側からの奈良井川、東側からの女鳥羽川・薄川・田川と合流して犀川となり、明科に至る。これらの流域は、西部の山地は砂岩・粘板岩・石灰岩・チャートなどからなる中生代の地層、南側は黒雲母粘板岩、東側は第四紀層の安山岩を主体とした地質である。梓川の東部から安曇野市豊科東部を結ぶ地域では、旧河川の礫床が露出しているため、生産力の弱い浅耕土地帯である。一方西部では、扇状地をつくる火山灰土中の微細粒子と梓川沖積土をつくる古生代の砂岩・粘板岩・角岩等の風化生成物が混ざり合って堆積しているため、土地が肥えて農作物がよく育つ土壌が生成されている。この地質のなかには、玢岩・花崗岩・安山岩などの風化物も混合している。犀川は安曇野市明科で高瀬川および穂高川と合流し、犀峡と呼ばれる溪谷を北上して長野市で千曲川と合流し、新潟県で信濃川と名を変えて日本海へ流れ出る。一方、松本平の東側にある筑摩山地は、第三紀の軟岩の砂・礫・粘土層や珪岩質岩石・玢岩・流紋岩質岩石・礫岩・砂岩・凝灰岩質岩石から成る。会田川の源流地であり、犀川と合流する。

松本平の土壌は、西部の飛騨山脈や東部の筑摩山地の褐色森林土壌、大町市から塩尻市・山形村などの標高800m前後の尾根の末端や凸地にみられる赤色土壌、尾根筋のポドゾル化土壌、山腹や中腹から沢沿いにかけてみられる褐色森林土壌が低地や台地を囲むように分布している。飛騨山脈の山麓に発達した複合扇状地上流部の台地は、黒ボク土壌を主体として分布している。そして、大町市から塩尻市にかけて発達した扇状地には、細粒～粗粒灰色低地土壌が広範囲に分布している。高瀬川付近の低湿地帯には細粒グライ土壌がみられ、安曇野市穂高、本郷、松本市里山辺には褐色低地土壌が広がっている。完新世の沖積層は大町市から塩尻市まで広がるが、

そのうち安曇野市から松本市街地にかけては標高600m以下の平らな地形となっている。一方、北部の大町や南・西部の旧梓川村から塩尻市の一部はなだらかな傾斜が広がっている。

松本平では前述のように高瀬川と梓川を中心に土地が形成されていった。大町市から塩尻市にかけて南北にのびる沖積低地が広がり、鎖川と奈良井川に挟まれる一部の地域では畑作地として利用されているが、大部分は水田として現在利用されている。二大主要河川やその支流だけでなく、堰が低地に広がっていることから、土地が水田として機能するように整備された背景がうかがえる。犀川が信濃川へと通じ松本平周辺の地域との交流を可能にしたことにくわえ、松本平内部では高瀬川と梓川などの河川とその支流が広がっていることから、これらの河川を利用した水運が想定できる。松本平の縄文時代遺跡は南部の山麓地帯を中心に集落が広がり、山への狩猟採集に適応する形がとられているが、弥生時代以降は稲作に適した沖積地を利用するために河川を中心とした低地に居住を移し、作物生産へと生活を転換していった。古墳時代には複合扇状地と低地を囲むように西側の飛騨山脈(北アルプス)や東側の筑摩山地の山麓に古墳が築造され、その際には河川の岩石の利用並びに水運を活用されたことが想定される。古代には堰の整備が進み、現在の土地利用に繋がっている。

第2節 穂高地域の地理的環境

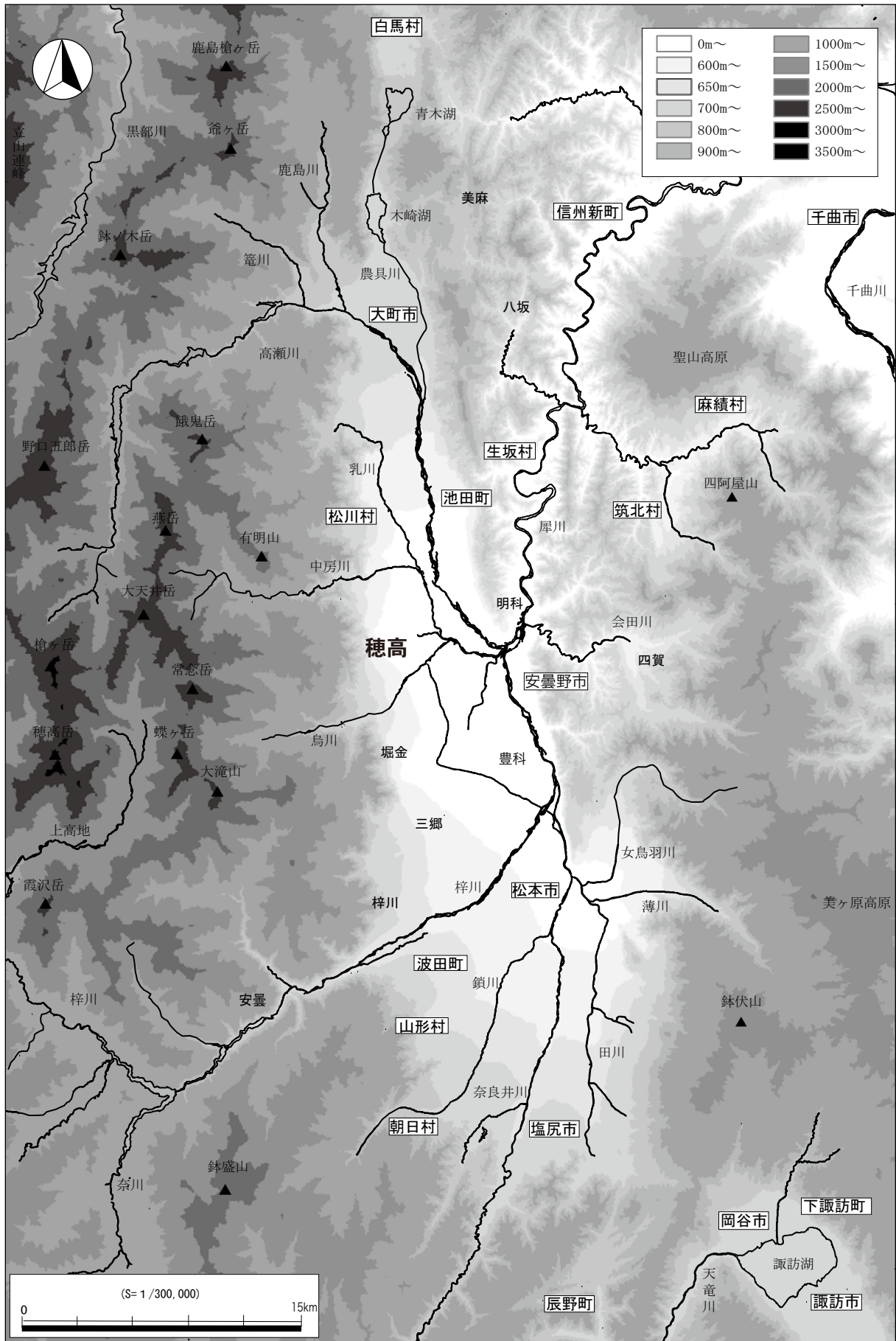
穂高古墳群が所在する穂高地域は、長野県安曇野市の北西に位置し、形状はほぼ東西に長い楕円形である。西境には北アルプスが連なり、燕岳、大天井岳、常念岳が並ぶ。この西方の山岳地帯は穂高地域全面積の約3分の2を占める。西側の山岳地帯に対して、東側の3分の1は安曇平と呼ばれる沖積地で、生活生産地帯が広がっている。犀川の支流の中房川が北部を、烏川が南部を流れ、それぞれ発達した扇状地を形成している。穂高地域はこれらの扇状地を囲むように西に山が連なり、多くの河川が地域一帯を流れる地形である。低地部の暖温帯から山岳部の寒帯にわたる気候は、多様な生物種を擁することに繋がっていった。

北アルプスに源を発する中房川と烏川は穂高地域の主要な河川である。この流域には沢や引水した堰が多数存在し、山裾では扇状地を形成している。中房川は東沢乗越に源を発し、流域のほとんどが花崗岩地帯となっている。斜面はV字谷で河床礫は大きく、多くの部分で基盤岩が露出して峡谷を形成している。中房川扇状地は、扇頂が標高750mの宮城、扇端が乳房川の右岸に沿って発達する低位段丘崖となっている。面積は約23km²で有明地区の平坦地のほぼ全域を占める。他の扇状地の影響を受けていないため、山地を出てからほぼ180°に広がりながら平地に押し出し、全体の形は平行四辺形に近い。長軸は北西-南東方向をとり、穂高川に向かっている。扇状地の形成物は運搬された花崗岩の砂礫であり、扇頂部付近に堆積した花崗岩の巨礫は古墳の石室の石材や有明山神社の石造物などに古くから利用されてきた。

烏川は蝶ヶ岳から流れ出る蝶ヶ沢が源流であり、河床は粘板岩・硬砂岩・チャート・ホルンフェルスなど、中・古生層の礫が占め、全体的に黒っぽい岩石が多い。須砂渡より上流の烏川沿いに5段の河岸段丘、下流に広大な扇状地が広がる。扇頂を須砂渡付近とし、扇端の田尻から下堀北方にいたる間は扇状地段丘となる。面積は約30km²で、烏川、牧・柏原の各地区のほぼ全域と三田地区の一部を含む。

烏川・中房川の両河川が形成する扇状地群を抜けると、中房川は有明地区で乳川と合流して乳房川、さらに穂高橋下流で烏川と合流して穂高川となり、狐島東方で高瀬川と合流する。高瀬川との合流点の河床の標高は松本平の中で最も低く、ここを中心に穂高東部、明科下押野、豊科重柳北部にかけて低湿地帯が形成されている。中房川・烏川の両河川の扇状地がこの地帯に向かって張り出しているという松本平の土地形成運動がこの低湿地帯を生み、沖積地が形成された。この沖積地には氾濫原が広がり、肥沃な土地が形成されている。穂高地域も松本平全体と同様に低地の沖積地を農耕可能な土地として利用している。

このように、穂高地域を含む松本平は、長い年月をかけて河川による扇状地の堆積物が沖積地を形成し、作物を生産できる土地を提供した。また、高瀬川や梓川をはじめとする河川や、古代からの人々によって整備されていった堰は土地の水田利用だけでなく物資の運搬にも活用された。(紺谷・坂才)



第3図 松本平周辺の自然環境

第IV章 松本平の歴史的環境

第1節 縄文時代

松本平では600か所ほどの縄文時代遺跡が確認されている。約1万年続いた縄文時代は草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6期に分けられるが、松本平では草創期の遺跡は確認されていない。

(1) 早期

この時期の中部地方を代表する土器は押型文土器である。押型文土器が出土している遺跡では高出遺跡群に属する一夜窪遺跡・向陽台遺跡(塩尻市)などが代表的である。

向陽台遺跡では4軒の竪穴住居が確認され、うち1軒は径9mほどの円形を呈し、当該期の住居としては最大級の規模を有している。また、石器群も豊富であり、押型文土器の遺構、遺物としては重要な位置づけにある。

早期の特徴的な遺物としては異形部分磨製石器(川崎2003)があげられる。異形部分磨製石器は石鏃を大きくしたような形をしているが、石鏃のように鋭利に尖っていない。九州地方から東海地方・中部地方にかけての西日本の広い地域でも、現在までに数か所の遺跡から80点の出土例のみの稀少な石器である。山の神遺跡(大町市)では、国内最多の異形部分磨製石器が41点出土している。比較的集中して出土し、特定の石材に集中している点、未製品・石核・原石がない点などから、製品として持ち込まれた可能性が高い。そのほか、竪穴住居12軒、土坑174基、集石遺構・石列66基が検出されている。遺跡のほぼ中央には竪穴住居に囲まれるようなかたちで「コ」字状区画の石列が位置しており、このような方形配石は熊本県大津町瀬田裏遺跡に1例認められるのみで、全国で2例目である。瀬田裏遺跡でも異形部分磨製石器が20点出土している。

(2) 前期

前期の遺跡は早期と比較すると増加傾向にあり、分布域は山麓・台地へ広がり、数軒のイエを中心としたムラが各地にできた。この時期には近畿地方・東海地方・関東地方の縄文文化が流入した。そのなかで前半は神ノ木・有尾式などの信州独自の土器が初めて誕生し、後半には関東地方の諸磯式の分布圏となる。石器では石鏃の比率が低下し、石皿・磨石等の植物加工にかかわる石器が増加する。

松本平では、舅屋敷遺跡・北原遺跡・女夫山ノ神遺跡(塩尻市)、有明山社遺跡(松川村)、上原遺跡・藪沢I遺跡・一津遺跡(大町市)などの遺跡が確認されている。塩尻市片丘陵に立地する女夫山ノ神遺跡では、前期末の土偶が1点出土している。この土偶は下半身を欠く胴上半部の破片で、手を伸ばし、顔に目・鼻を表現したものである。大町市籠川の扇状地に立地する上原遺跡では環状列石と、石積遺構が出土している。遺物は約1万点におよぶ土器片と石器140点、未製品も含め玦状耳飾り32点が出土している。同様に藪沢遺跡や有明山社遺跡でも未製品を含む多くの滑石製の玦状耳飾りや滑石の塊、石屑が出土している。これら前期の玦状耳飾りの製作遺跡は、大町周辺及び姫川下流域に集中している。

(3) 中期

中期には後半期を中心に大規模な遺跡が発見されており、遺跡数もこの時期が最も多い。この傾向は東日本全体と同様であり、中期は縄文時代のなかでもっとも繁栄した時期といえる。大規模な遺跡の多くは、南部の東山山麓と西山山麓に集中して確認されるが、数は西山山麓の方が多(鳥羽2010)。これは、東山山麓が松本盆地を形成した際に生じた崖錐性の堆積物から形成された丘陵のため集落の範囲が制約されたのに対し、西山山麓は奈良井川や梓川等の大きな河川によって形成された複合扇状地のため集落を広げることができたからと考えられる。遺跡の増加に伴い土器や石器も多量に出土し、器台や有孔鏢付土器、釣手土器、壺などの器種分化も著しく、前半期には関東西部と共通する勝坂式が広がる。松本平は唐草文土器の中心であり、大規模な集落が多く営まれた。また土偶や釣手土器なども唐草文土器と同様に地域色をもって分布している(谷口1998・中村2010)。中期後半には全国で最も多くの土偶が確認され、出土遺跡や出土量が飛躍的に増加する。この地域の土偶の大きな特徴

として下腹部に三角形の区画を配した対称弧刻文が施されることが多い。

この時期の主な遺跡としては西山山麓では熊久保遺跡(朝日村)や三夜塚遺跡・殿村遺跡(山形村)、離山遺跡・他谷遺跡・東小倉遺跡(安曇野市)、東山山麓では小池遺跡・坪ノ内遺跡(松本市)、俎原遺跡・小丸山遺跡・平出遺跡(塩尻市)などがあげられる。片丘丘陵に立地する俎原遺跡は中期初頭から中期末までの竪穴住居が147軒検出されている。また、台地の西側斜面に立地する坪ノ内遺跡は前期末から後期前半の長期にわたる集落址で、中期では6軒の住居址が検出されている。遺物においては復元可能な土器が多量に出土している。土製品の量も多く、特に土偶は中期で43点出土しており、松本市内では最も多い。奈良井川扇状地に立地する平出遺跡は縄文時代から古代まで続いた大集落であり、縄文時代では前期を除く早期から晩期まで続くが、そのなかでも最も栄えたのは中期であり、88軒の竪穴住居が検出されている(小松2006)。これらの住居址は、前葉には東・西南端、中葉になると中央部、後葉には中央及び西側に分布するという変遷をたどっており、中期約1000年の間に集落の中心が移動していった。また、遺物では土偶が60点出土しており塩尻市最多の出土数を誇る。

(4) 後期

繁栄した中期と比べて遺跡が急激に減少し、集落は山麓や台地から低地へ移る傾向にある。前半は中期の土器にみられた地域的な個性が稀薄化し、関東地方を中心とした堀之内・加曾利B式土器分布圏の外縁地域として包括されるが、後半には中部地方独自の高井東式を生み出す。土偶には関東西部と共通する仮面土偶がみられるが、数量は減少し、特定の集落に集中して多量の土偶を出土する傾向がみられる。中期末から後期にかけては、関東・中部一帯に住居の床面に平らな石を敷き並べる敷石住居が出現する。一方、完形の鉢等の土器を遺体の頭部に被せる土器被覆葬が長野県を中心に分布するなど、独自の要素も少なくない(中村2008)。

この時期の遺跡としては女鳥羽川遺跡・井刈遺跡(松本市)、北村遺跡・ほうろく屋敷遺跡・離山遺跡(安曇野市)などが確認されている。敷石住居は林山腰遺跡・荒海渡遺跡・葦原遺跡(松本市)、北村遺跡(安曇野市)、御堂垣外遺跡・柿沢東遺跡・平出遺跡(塩尻市)などで検出されている。犀川右岸に立地する北村遺跡は300体の人骨が出土したことに加え仮面土偶が100点出土した。また、58軒以上の住居と469基の墓坑などが検出されており、その中で敷石住居が29軒確認されている。墓坑には墓坑上面に配石を残すものが多く、完形土器の被覆葬も5例確認されている。犀川西岸の段丘上に立地するほうろく屋敷遺跡では5軒の住居と大形石棒を埋納したものを含む多数の土坑が発見されている。遺物では7,000点以上の多量の石器が検出されており、そのうち80点以上が石棒や石剣類で、土製品では土偶が52点出土している。女鳥羽川流域に立地する女鳥羽川遺跡では関東地方の文化を取り入れた土器や、直径9.5cmの大型中空仮面土偶の頭部と全長25cmの板状土偶の全身像が検出されており、この大きさは後期においては松本平最大である。離山遺跡は大規模な集石遺構と配石遺構が検出された遺跡として知られており、17点の土偶が出土している。大規模な配石遺構は井刈遺跡でも知られている。

(5) 晩期

晩期になると遺跡数はさらに減少する。土器は東北地方を中心とする亀ヶ岡式土器と東海系土器が流入し、2つの文化の影響を受けつつ弥生時代の土器に移行していく。また土偶は限られた遺跡で出土するのみとなる。また、後期・晩期にかけて、墓の主体の周囲に平石を並べた石棺墓が関東甲信越にみられる(加藤2006)。

遺跡では石行遺跡・エリ穴遺跡・女鳥羽川遺跡(松本市)、福沢遺跡(塩尻市)、一津遺跡(大町市)などが確認されている。後期から晩期にかけての関東・中部では土製耳飾りが多数出土し、松本平では東南部にあるエリ穴遺跡で2,534点検出されており(樋口1998)、そのなかには精巧な透かし彫りや文様が施されたものも存在し、直径9cmをこえる環状を呈するものもある。このほか、土器・石器・土製品・石製品・自然遺物も出土している。石器の石材の中には長野県和田峠産の黒曜石や岐阜県産の下呂石で作られた鎌もあり、広範囲に交易が行なわれていたことを示している。土偶は360点以上出土しており、亀ヶ岡文化に特有の遮光器土偶を模したと考えられるものも出土している。晩期の東日本で盛んに作られた土版も14点発見されており、特徴的なものとして人の顔を表現したものが3例含まれる。竪穴住居は8軒確認され、この時期の住居が見つまっているのは松本市内では当遺跡のみである。また、配石遺構が24か所で発見されており、石の多くが火熱を受け、焼けた動物の骨も出土

している。遺跡西側のくぼ地では、縁から底にかけて数多くの石や焼けた石があり、石の間から彫刻文様で装飾された土偶が100点出土している。浅鉢や壺など、縄文時代晩期の小型の土器が数多く置かれており、近くでは遮光器土偶の頭部や石剣・石刀などの道具も発見されている。大町市木崎湖の東岸に立地する一津遺跡では住居址が2軒確認されているほか、石棺墓も確認されている。(鳴海・矢花)

第2節 弥生時代

(1) 前期

松本平の弥生時代の遺跡は141か所を数える。前期の遺跡は奈良井川の支流である田川の河岸や扇状地などに形成され、代表的な遺跡としては横山城遺跡(松本市)があげられる。この遺跡は沈線文や磨り消し縄文土器などの縄文時代の土器とともに、濃尾平野の特徴をもつ東海系の条痕土器や磨製の石包丁が出土しており、まさに縄文時代から弥生時代への過渡期の遺跡といえる。こうした縄文文化と弥生文化の併行は境窪遺跡(松本市)にもみられ、ここでは縄文時代的な円形住居と弥生時代的な方形住居が混在している。また、方形周溝墓以前の礫床木棺墓や土器棺墓もみられ、前者からは人骨片が検出されている。この時期に特徴的な遺物としてあげられるのが、黥面付土器である。前期末に出現する下境沢遺跡(塩尻市)では、土坑からほぼ完形品が出土しており、ほうろく屋敷遺跡(安曇野市)では土器棺再葬墓群の1基として検出されている。この土器は古くから再葬との関係が指摘され、長野県内の前期から中期の遺跡では、骨を壺に入れて蔵骨器とした壺棺再葬墓がみられる(塩尻市教育委員会編1998)。また、針塚遺跡(松本市)のように東海系の条痕土器を再葬に使用した例もある。

(2) 中期

中期に入ると、千曲川流域の東北信と天竜川流域の中南信を中心とした、二つの独自の弥生文化圏が形成され、前者は栗林・百瀬式土器文化圏、後者は北原・恒川式土器文化圏と呼ばれている。松本平はこの二大文化圏のほぼ境界に位置しているが、おもに栗林・百瀬式の土器文化圏に属する。このころの集落は、弥生時代開始期の集落が比較的短期間の継続に止まるのに対し、規模も広がり、長期間の継続がみられるようになる。長野県内ではじめて発掘された弥生時代の遺跡として有名な百瀬遺跡(松本市)は、土器の種類も壺・甕・鉢・無頸壺・高杯のセットが揃っていることから、この時期の遺跡の典型例とされている。宮渕本村遺跡(松本市)では竪穴住居が144軒検出され、出土土器に弥生時代後期以降の形式もみられることから、長期間継続した大規模集落であることがわかる。また189基検出された土坑には人骨が出土しているものもあり、墓坑の可能性も指摘されている。県内でも発見例の少ない無樋式磨製石戈も出土している。

(3) 後期

後期前半の松本平では、北部と南部で土器文化圏の様相が異なる。北部は栗林・百瀬式から続く吉田式・箱清水式土器文化圏の影響を強く受けており、南部は伊那地方の土器文化である座光寺原式・中島式土器文化圏に属している。しかし後期後半になると、座光寺原式・中島式土器文化は吉田式・箱清水式土器文化の進出によって衰退し、県内全域が箱清水式文化に統一される(小山2008)。宮渕本村遺跡からは銅鐸の鈕部分が発見されており、これは柴宮遺跡(塩尻市)出土の完形銅鐸と同形式である。柴宮遺跡出土銅鐸は袈裟襷文のなかでもっとも発達した段階のものであり、三遠式の扁平鈕式である(大場・原1961)。このことは、東海地方との交流を意味している。そのほかの青銅器文化における他地域との交流としては、大町市にある海ノ口上諏訪神社に保管されている銅戈があげられる。これは大阪湾型に属するものであるが、摩滅がみられるうえに通常よりも細身で、研ぎ減りの可能性をもつ(大阪府立弥生文化博物館2001)。墓制については、後期に遺跡数が増加する塩尻市では、丘中学校遺跡で方形周溝墓が出現し、ガラス小玉や鉄釧が発見されている。同市ではほかにも向陽台遺跡・中挾遺跡・和手遺跡などで方形周溝墓がみられ、五日市場遺跡では円形周溝墓も検出されている。こうした銅鐸や方形周溝墓の存在は「長」の出現を物語っており、彼らは次の時代の「首長」として松本平を統治していく存在となっていく(樋口1986)。(伊藤・長谷川)

第3節 古墳時代

(1) 前期

前期の松本平には、弥生時代後期に引き続いて東海系土器がみられる。なかでも顕著にみられるのが伊勢湾岸地方に特徴的なS字状の口縁をもつ台付甕と、「パレス・スタイル」とよばれる口縁部に装飾の施された壺(以下パレス式土器)である。この時期の集落遺跡から発見される住居のほとんどは竪穴住居で、掘立柱建物が増加するのは古墳時代後期以降のことである。

この時期の特徴的な遺跡として、弘法山古墳・中山36号墳・出川南遺跡・向畑遺跡(松本市)があげられる。中山丘陵上に位置する弘法山古墳は3世紀末に築造されたと考えられる前方後方墳で、長野県内最古の古墳とされており、舶載鏡の半三角縁四獣文鏡や鉄鎌、東海地方からの搬入品と思われる土器が出土している。近くに位置する4世紀前半に築造されたと考えられる円墳の中山36号墳からは、文様の表出や銘文などが弘法山古墳出土鏡と近似する六獣文鏡が出土しており、この2基の古墳の被葬者は同じ系譜上にあると思われる。出川南遺跡では弘法山古墳から出土したパレス式土器に近似した土器が出土しており、愛知県廻間遺跡出土土器を標識とする廻間Ⅱ式後半期に該当し、実年代では3世紀後半とされている。

向畑遺跡は平地部からの比高差約100m以上の高地に築かれた複合遺跡で、古墳時代前期の竪穴住居が57軒確認されており、この時期にこれだけ多数の住居がまとまって確認されることは県内でも珍しい例である。

(2) 中期

前期後半になると長野県下でも千曲市の森將軍塚古墳や長野市の川柳將軍塚古墳といった前方後円墳が築かれ始め、さらに中期になると、土口將軍塚古墳(長野市・千曲市)、倉科將軍塚古墳(千曲市)など、善光寺平中央部を中心に前方後円墳が築造されるようになり、この時期に導入されたと考えられる須恵器の出土例も確認されている。しかし、その様相は画一的ではなく地域ごとに特徴がある。松本平に限って述べると前方後円墳は1基も確認されておらず、円墳が主流で副葬品も剣1口が納められた墳丘墓的な性格をもったものが多い。

この時期の特徴的な遺跡として、桜ヶ丘古墳・針塚古墳・高宮遺跡・出川西遺跡・山影遺跡(松本市)があげられる。桜ヶ丘古墳は径30mの円墳で、甲冑などの武器・武具類のほかに金銅製天冠が出土したことで有名で、これらには5世紀後半から6世紀末までの1世紀余りにわたって使用された細帯式技法が用いられている。天冠は単なる装身具でなく、社会的地位を示すものであり、甲冑と同様に大和政権からの下賜品と見なされている。

針塚古墳は薄川扇中央部に築造された2世紀間にわたる積石塚古墳群の1つで、そのなかでも最も早い時期に築造された古墳である。積石塚は渡来系の文化を示すものともいわれており、竪穴式石室や周溝のなかから舶載鏡や武器・馬具・須恵器が出土している。

祭祀遺構が確認されている高宮遺跡では、正位に置かれた高杯、逆位に置かれたミニチュア(手捏ね)土器や多種多様の玉類、石製模造品類、鉄鎌などの鉄器類、土製品が大量に出土した(竹内1994)。周囲からも規模は小さいが、同様の祭祀遺構が数か所確認されており、これらは西を流れる奈良井川の氾濫を恐れた首長が行ったものと想定されている。その南側に展開する出川西遺跡では、配石遺構や意図的に土器をまとめて置き去ったと思われる遺構が確認されている。出川西遺跡から高宮遺跡にかけての微高地一帯が古墳時代中期において、広域な祭祀にかかわる特別な空間として認識されていたと考えられている(竹原1999)。

集落遺跡としては山影遺跡があげられ、初期須恵器や土師器、滑石製模造品や勾玉、管玉、ガラス製小玉などの装身具が出土し、21軒の竪穴住居が確認されている。前期に大規模なムラが進出した向畑遺跡のある丘陵に対峙する場所に立地している。なお、向畑遺跡では中期の竪穴住居が2軒のみと、ムラの規模が急激に縮小する。これは向畑遺跡で前期に集落を営んでいた人々が、中期になって山影遺跡に集落を移し、集落内の有力者がかつての生活の場に古墳を築き始めたためと考えられている(関沢1993)。

(3) 後期

後期になると、伊那地方では塚原二子塚古墳・高岡1号古墳・馬背塚古墳(飯田市)といった前方後円墳が築造され、規模も副葬品も充実する傾向にある。一方で、松本平においては中期同様に前方後円墳が確認されていない。墳形は円墳が多くなり、大きさも前期や中期に比べて小さくなっている。横穴式石室が登場し、副葬品には武器、武具、馬具、装身具が多くなっている。全国的にこの時期には土師器・須恵器が大量に出土しているが、松本平においては金属器も多く出土している。土師器や須恵器では杯・高杯・壺が特に多く、金属器では鎌・刀子などの生活必需品が多い。竪穴住居は10m未満の小さなものから、40mを超える大きなものまであり、多様化がうかがえる。集落や古墳は松本市を中心に点在し、大町市・安曇野市・塩尻市でも確認されている。

穂高古墳群に近接する地域としては、旧明科町において13基の古墳が報告されている。そのうち潮神明宮前遺跡の7世紀後半～8世紀初頭の古墳が1基確認されている。直径15.6mの円墳で、石室の長さ約5m・幅1.3m、玄室と羨道とに分かれている。副葬品は耳環・勾玉・切小玉・丸玉・白玉・ガラス小玉・金属片が確認されている。時代や構築されている地形などを考慮すると、穂高古墳群との直接の関係性は薄いと思われる。

大町市には小熊山東南麓古墳群・小熊山東麓古墳群・新郷1号墳がある。小熊山東南麓古墳群は鹿島川扇状地扇中部北端に位置し、古墳8基と数基の古墳跡から構成されている。1983年に市史編纂事業の一環として発掘調査された際、直刀5・刀子15・鉄鏃50・轡1・金環4・ガラス小玉・土師器・須恵器など多量の遺物が出土した。6世紀後半に構築されたのち追葬が行われた可能性があり、最後の埋葬は8世紀初めと考えられる。小熊山東麓古墳群は横穴式石室をもつ3基の古墳から成っている。1980年に直刀と骨片が検出されており、この直刀から古墳の年代は7世紀中ごろとされている。1983年に市史編纂事業により調査が行われた新郷1号墳は、南北径12m、東西径10.5mの積石塚である。横穴式石室の長さは8m、幅は南側の羨道で1m、北側の玄室で1.5m、石室の高さは1.5mである。副葬品は太刀5・鉄鏃50・刀子10・轡1・碧玉製管玉7・金環4・ガラスなどの丸玉60・土師器・須恵器が出土している。

中山丘陵にある中山古墳群(松本市)は73基の古墳から成る古墳群である。これまでに24基が調査され、土師器・須恵器・武器・武具・馬具・装身具・玉類が出土している。6世紀前半から7世紀末～8世紀前半に比定され、約200年にわたって古墳の築造や被葬者の供養が行われていたと考えられる。

次に集落遺跡についてみていく。借馬遺跡(大町市)は鹿島川扇状地末端にあり、竪穴住居が検出され、土師器や須恵器が出土した。この遺跡はかなり広範囲であるが、水害などのない場所を中心に集落をつくっている。穂高古墳群の被葬者に関係すると思われる集落遺跡は現在の穂高駅から柏矢町駅周辺の鳥川扇状地の沖積地で発見されている。馬場街道遺跡ではこれまでに古墳時代前期2軒、中期2軒、後期3軒の住居、近接する矢原五輪畑遺跡では土製勾玉が確認されている。また、穂高神社境内において明治時代の井戸掘削で土師器が採集されているほか、藤塚遺跡では古墳時代後期の住居址30軒と掘立柱建物5棟が調査されている。このほか、中房川扇状地では耳塚遺跡から古墳時代前期の土師器が確認されているが、厚い沖積層の堆積によりこの一帯の遺跡の分布は不明な部分が多い。

千鹿頭北遺跡は松本盆地の東端にある鉢伏山の山麓にある。遺物は土師器、須恵器が中心で、把手付壺などの特徴的な器種も多数出土している。後期に至って急激に規模を拡大した集落で、調査面積は広くはないが多くの住居址が重なるように検出されており、多くの住居が同時に存在していた(直井1996)。薄川扇状地の扇中央に位置する下原遺跡(松本市)では奈良時代まで継続して生活が営まれており、掘立柱建物12棟、竪穴住居26軒が検出されている。出土した土器は土師器が多く、供膳形態よりも煮沸形態が多い。

奈良井川扇状地上にある平出遺跡(塩尻市)は、東西1km、南北300m～400m、面積15haの広さの巨大な集落遺跡である。1950年代の調査では土師器や須恵器などが大量に出土し、1990年の調査では後期の住居が4軒、2003年の発掘調査ではさらに1軒が発見されている。この遺跡では焼失住居がほかの遺跡に比べて非常に多いため、火災や争い事などがその理由として考えられてきた。しかし近年「住居廃棄に伴う祭祀」が行われていたことも考えられるようになってきた。また、祭祀に関連した遺物と考えられるものとして子持勾玉や石製模造品、

柄杓形土製品や土馬などが出土しており、村のなかで頻繁に祭祀が行われていた可能性が出てきた。今後も引き続き注目していく必要がある遺跡である。この頃の祭りには、先祖を祭るもの、豊饒を祈り感謝するもののほかに、身のまわりの火や水、樹木などに神性を認め、祭ることもあったと考えられる(直井1996)。(秋山・加納)

第4節 古代

(1) 文献史料からみた古代の松本平

律令体制

大宝2(702)年の大宝律令の施行により、全国は畿内と七道に分けられ、その下にいくつかの国が置かれた。現在の長野県にあたる地域には東山道に属する科野国が置かれていた。国はその行政の規模によって大・上・中・小の4等級に分けられ、科野国は上国とされた。科野の名称の由来であるが、科野の「野」については、山裾のゆるやかな傾斜地をさすといわれている。「科」の由来については諸説あるが、もっとも有力なのは^{しなさか}級坂の多いクニとする説である。「科」は階段や層をなして重なった段丘状の地形をさす言葉であり、科野という国名は、山国で級坂の多いところからつけられた名とされている。

科野国の下には伊那・諏訪・筑摩・安曇・更級・水内・高井・埴科・小県・佐久の10郡が置かれた。このうち筑摩郡と安曇郡が松本平に位置していた。筑摩は「つかま」と読み、『日本書紀』の天武天皇14(685)年には天皇が科野国^{かりみや}に行宮をつくらせたという記事がある。そこに「蓋擬幸東間温湯^{つかま}歟(東間の湯においでになろうとしたのであろうか)。」あり、大宝律令以前からの地名であることがわかる。安曇郡の「安曇」の由来は海人の統率者であった安曇氏の定着ともいわれ、現在の安曇野市にある穂高神社は海神である^{わたつみのみこと}綿津見命を合祀している。

『続日本紀』によれば、和銅6(713)年5月に、畿内七道の諸国の郡郷名には縁起のよい文字である好字を用いることとなったという。これ以後、従来の「科野」にかわり、「信濃」が用いられるようになったと考えられる。おなじく7月には、東山道のバイパス的役目を荷っていたと考えられている^{きそじ}吉蘇路が筑摩郡に開通している。

東山道は中央政権が政治上の目的をもって各地方にある重要性の高い古道を特別に整備した道、いわゆる「官道」の1つである。官道は官人の交通、軍馬の派遣など重要な役割を担っており、このため官道には一定の距離をおいて^{うまや}駅家を設け、一定数の馬を常備する駅制という制度があった。『延喜式』の「諸国駅伝馬条」によると筑摩郡を通過する官道には、^{かがし}覚志と^{にしごり}錦織の駅家があり、覚志には^{ひき}10疋、錦織には15疋の駅馬が常備されていた。駅家やその近くには最低10戸から15戸からなる集落が存在していたと考えられ、集落に隣接して駅家郷を設けた例が他地域にみられる。吉田川西遺跡(塩尻市)の付近では乏水地域ながらも多くの集落跡が発見されており、このことから覚志駅家はこの付近に比定されている。松本市岡田も同様に乏水地域でありながら、二反田・岡田町遺跡では多くの住居跡が発見されており、錦織駅家に比定されている(桐原2004)。

国府

中央から信濃国に派遣された国司が政務を執っていた信濃国府は、そのものの位置をしめす史料・地名・伝承・遺跡は確認できないが、国分寺の存在から小県郡に置かれたというのが定説とされてきた。

ところが『日本三代実録』の元慶3(879)年9月の条に「^{あがたざか}県坂の^{やまぎわ}山岑をもって美濃と信濃の国境とした」という記事があり、そこでは「今此地、去美濃国府、行程十余日、於信濃国、最為逼近(県坂の山岑は、美濃国府(岐阜県不破郡垂井町)から十余日の遠い距離にあるが、信濃の国府からはすぐ近いところにある)。」と記されている。この県坂を鳥居峠とする説が有力で、そのあたりからすぐ近いところは筑摩郡である。また10世紀前半に編纂された『和名類聚抄』巻5には信濃国筑摩郡の項に「国府」の割注が付されている。『和名類聚抄』は成立こそ10世紀前半であるが、上記の『日本三代実録』の記事があるため、信濃国府は8世紀末から9世紀前半には小県郡から筑摩郡に移転していたと考えられる。国府が筑摩郡のどこにあったについては、松本市惣社付近とする説が有力である。「惣社」は「総社」とも記し、国府にもっとも関係の深い神社の名前である。総社は国司の任務のひとつである国内の神社すべてへの参拝の代わりに、国府の近くに社を設けて国内の神々を集めて祀り、そ

れに参拝することでその任務を果たしたものとするもので、平安時代後期ごろから広まった。惣社の地名から、国府もこの付近にあったと考えられる(原1996)。

税 制

『延喜式』には信濃から中央へ納められた貢納品が記されている。それによると調として紺布・縹布・緋革・麻布・商布を納めることになっていた。紺布は紺色で縹布は露草で染めた麻布、緋革は緋色に染めた革、商布は貨幣の変わりとして交易用に織られた布のことである。庸はすべて麻布で納めることになっていた。男は糸を紡げず布も織れず、調庸負担義務のない女の作業に頼っていたという。幅広の布を織れる機は一般農家にはなく、郡司や富豪層が所有する機に頼らざるをえなかった。供出されて国印が押された布は、官物として京に運ばれていく。信濃から京までは往路21日、帰路10日の日数を要する厳しい旅であった。正倉院宝物白布に残る墨書銘には天平勝宝4(752)年10月に筑摩郡山家郷の小長谷部尼麻呂が調庸布を、同じく天平宝字8(764)年に安曇郡前科郷の戸主である安曇部眞羊が調庸布を貢納したことが記されている。また平城宮から出土した木簡には、筑摩郡山家郷から労役に服していた椋椅部逆という男に対して生活費を送ったと記されている。

10世紀後半になると諷誦料として信濃布を仏寺に寄進する記事が増加する。信濃布は信濃などから納められる一定の品質の布の呼称であった。信濃産でなくとも、品質の同じ麻布は信濃布と呼ばれていた。おそらく信濃産の布が大量に貢上され、そのうえ品質も良かったため、それが麻布の代表とみなされて信濃布と呼ばれるようになったと考えられる。信濃布の文献上の初見は貞観15(873)年の『広隆寺資財帳』である。また『延喜式』に「凡太政官并出納諸司季祿布。以信濃布給之。(太政官ならびに出納諸司の季祿の布は、信濃布をあたえる)」という規定があり、『延喜式』の成立した延長5(927)年以前には信濃布がすでに公的な用語として使用されている。

(2) 集落

信濃の古代住居には竪穴住居と掘立柱建物の二形態が存在する。信濃における古代の住居は、竪穴住居が首位を占めている。大量の木簡が出土した遺跡に、雨宮廃寺(千曲市)がある。雨宮廃寺は雨宮坐日吉神社の西側にあたり、定額寺のひとつである屋代寺と推定されている。1962年の発掘調査で検出された礎石から南北2棟の建物跡が想定されており、出土瓦は六葉単弁蓮華文軒丸瓦・重弧文軒平瓦・丸瓦・平瓦などで、丸瓦は行基式丸瓦である。この雨宮廃寺跡は屋代遺跡群に含まれており、7世紀後半の層から9世紀中頃の層にかけて木簡が126点出土し、紀年銘木簡・物部木簡・郡符木簡や木製祭祀具が大量に出土した。過去における数回の洪水砂により各遺物包含層がパックされ、木簡が良い状態で保存されたためと考えられている。これらの木簡に記された内容は、政治(国府・郡衙)、経済(繊維工房・出挙関係・荷札)、宗教(竈神木簡・祭祀具への墨書)、軍事などの多岐にわたっている。

平田本郷遺跡(松本市)では古墳時代から平安時代の竪穴住居172軒・竪穴状遺構26基・掘立柱建物13棟、同市の川西開田遺跡では奈良時代から平安時代の竪穴住居95軒・掘立柱建物18棟、同市岡田の宮の前遺跡では奈良時代から平安時代に属する一辺7m以上の大型住居6軒を含む竪穴住居31軒・掘立柱建物5棟が確認されている。

大村遺跡(松本市)は奈良・平安時代の大規模集落跡で、竪穴住居約120軒、掘立柱建物3棟が検出されており、軒丸瓦・軒平瓦・鴟尾片・円面硯が出土している。殿城の法楽寺遺跡(上田市)からは金銅三尊仏・磬・銅鉢といった仏教関連遺物が出土している。

穂高地区では古墳時代以来穂高神社周辺に継続して集落が営なまれ、三枚口遺跡、藤塚遺跡、八ツ口遺跡、馬場街道遺跡、矢原五輪畑遺跡などでその一端が発掘されている。

古代信濃の牧と集落

『延喜式』には信濃国内の牧として16牧が記載されている。その内訳は諏訪郡3牧(山鹿牧・岡屋牧・萩倉牧)、小県郡2牧(塩原牧・新治牧)、高井郡2牧(高位牧・大室牧)、筑摩郡2牧(埴原牧・大野牧)、安曇郡1牧(猪鹿牧)、佐久郡3牧(塩野牧・長倉牧・望月牧)、伊那郡3牧(平井手牧・笠原牧・宮処牧)である。しかし同じく『延喜式』の兵部省の条には「御牧は伊那郡にはなく」とあり、『延喜式』のそれぞれの条によって牧の数や地域が異なっている。

猪鹿牧は文亀元(1501)年の『穂高社造宮帳』に「穂高神社領四至堺の西側に猪鹿牧があった」という内容の記載があることなどから、現在の安曇野市穂高周辺に所在した牧と推定されている。南・東部は烏川を境とし、北は川窪沢川を境とする烏川扇状地の島状地形をなす地域に烏川本沢南添にある大平原^{おおでつばら}を加えた範囲とされている。自然の野馬止めになる地形が多く形成されており、牧に適した場所であった。

大野牧は松本市和田・今井から東筑摩郡波田町・同郡山形村にかけての一带とされている。

埴原牧は松本市中山の埴原に比定されており、範囲は烏内から埴原地内の北中島・南中島・古屋敷・千石にかけて広がる。埴原牧の管理集落とされている小池遺跡は同市内田・寿小赤に所在し、第2次調査までに奈良・平安時代の竪穴住居187軒、竪穴状遺構5基、掘立柱建物11棟、土坑墓1基などが確認されている。掘立柱建物は県内でも最大規模のものであり、小池遺跡は大規模集落であったことが判明した。出土遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・鉄器・石製品・土製品・銅製品・馬具などである。また小池遺跡の西に位置する一つ家遺跡からは平安時代の竪穴住居38軒、掘立柱建物1棟が確認されている。小池遺跡と同様に集落跡が検出され、出土遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・金属器・馬具などである。

吉田川西遺跡(塩尻市)では、古墳時代～平安時代に属する竪穴住居266軒・掘立柱建物8棟・墓壇2基が確認された。遺物は土師器・須恵器・黒色土器・灰釉陶器・緑釉陶器・陶磁器・金属器など多数出土しており、特殊な遺物として「榛原」や「蘇」とかかれた墨書土器が発見されている。「蘇」は乳製品を意味し、牛羊といった家畜も飼育していたと考えられる。こうしたことから吉田川西遺跡は、埴原牧の管理にあっていた村の可能性が高いとされている。

奈良井川と田川の間広がる芳川地区に所在する小原遺跡(松本市)では、遺構のほとんどが奈良時代末期～中世に属する。竪穴住居128軒、掘立柱建物9棟が検出され、出土遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器・鉄器・円面硯などである。小原遺跡の位置する芳川地区も良田郷に所属し、東山道が通ることから、本遺跡も埴原牧の管理集落であったのではないかと推定されている。

島立条里的遺構である三の宮遺跡・北栗遺跡・南栗遺跡は松本平のほぼ中央に位置する。三の宮遺跡では古代の竪穴住居179軒、掘立柱建物55棟、北栗遺跡では古代の竪穴住居235軒、掘立柱建物71棟、南栗遺跡では古代から中世にかけての竪穴住居336軒、掘立柱建物105棟が検出され、松本平で最大規模の建物を有する集落遺跡である。これらの集落域で特徴的なことは、大型の掘立柱建物を中心に竪穴住居と掘立柱建物で構成される遺構群が区画されるように配置されている地区が存在することである。

(3) 古代の寺院と神社

信濃国分寺と瓦窯

聖武天皇は国家仏教推進施策の総仕上げとして、天平13(741)年3月に「国分寺建立の詔」を發布し、諸国の国分寺(僧寺・尼寺)建設が進められていった。信濃国分寺跡は上田市大字国分寺仁王堂・字明神前に位置し、千曲川を南方に望む第3段丘面上に所在している。北の第2段丘面上には、古代信濃国分寺の伝統を継承した天台宗の信濃国分寺が所在し、南には官道の東山道が推定されている。1963年から1971年にかけて発掘調査が行われ、僧寺跡と尼寺跡の全容が明らかにされた。出土遺物は瓦・土師器・須恵器・灰釉陶器・青磁碗・円面硯・古銭・鉄釘などである。発掘調査から判明した信濃国分寺の特徴は、僧寺と尼寺がそろって完全に発掘されたことや、他国の国分寺では僧寺と尼寺の間の距離は約300m～400mが一般的だが信濃国分寺はわずか40mであったことがあげられる。また他国では尼寺の方がはるかに小さい例が多数であるが、信濃国分寺では僧寺と尼寺の規模があまり変わらない。1967年、尼寺跡北方約200m地点の国道18号線沿いで東西に並行して瓦窯2基を検出した。この瓦窯の構築材として縄叩き目や押型文の平瓦が多数使用されていることから、信濃国分寺補修用の瓦を焼いた平安時代初期の瓦窯とされている。また信濃国分寺跡出土瓦と同一の軒平瓦が上田市依田古窯跡群や千曲市込山廃寺から東に400m程の所に所在する土井の入り窯跡から出土している。

定額寺

律令国家のもとでの官寺は、東大寺・薬師寺などの大寺、諸国に置かれた国分二寺、及び定額寺に分類できる

とされる。『日本三代実録』貞観8(866)年2月2日条に、「以信濃国伊奈郡寂光寺、筑摩郡錦織寺、更級郡安養寺、埴科郡屋代寺、佐久郡妙楽寺、並預之定額寺」とあり、信濃国5箇寺を定額寺に列したことがわかる。定額寺とは、もともとは貴族や豪族そのほかが建立した私寺が律令国家の統制下に入って官寺となり、多くの特権を与えられた国分二寺と並ぶ鎮護国家のための寺のことである。以下、伊那郡座光寺・筑摩郡錦織寺・更級郡安養寺・埴科郡屋代寺・佐久郡妙楽寺の5つの定額寺及び推定所在地を見てみると、伊那郡座光寺の推定所在地は東山道の通路にあたり、郡衙の所在地とされ周辺から奈良時代後期の布目瓦や大寺の礎石などが確認されている飯田市座光如来寺(通称は元善光寺)の境内及びその周辺であるとされる(市村1961)。筑摩郡錦織寺は松本市反町にある洞光寺が河内の錦部郡観心寺(大阪府河内長野市)伝来の真言八祖画像を所蔵していることから錦織寺の後身とみるのが通説であるが、その根拠や所在地は不明確である。更級郡安養寺は東筑摩郡筑北村字松場にあたとされているが、付近から平安時代にさかのぼる遺物や遺構は見つかっていない。近年、千曲市八幡の八幡遺跡群で広範にわたり布目瓦が出土し、そのなかの青木遺跡から柱穴列や瓦塔片が発見され、ここに古代寺院があったとされている(牛山1993)。屋代寺は郷名で関係する地字名が残存している。『吾妻鏡』文治2(1186)年3月21日条に見える「加納屋代四ヶ村」の「加納坊」という地字が現在の千曲市屋代の東部・千曲川寄りにある。また市河文書の建武元(1334)年6月16日雑訴決断所牒に見える「屋代下条」の「下条」の地名が千曲市雨宮の北側に残存しているので、雨宮を中心とした千曲川の自然堤防上に広がった郷であるとされている。この雨宮集落の北寄りに鎮座する千曲市雨宮坐日吉神社の西側から南北2棟の建物址や礎石・礎敷が検出され、また古瓦が大量に出土した。出土した瓦の様式から、奈良時代から平安時代初期にかけて建立された寺院であったことが明確になり、この通称「雨宮廃寺跡」が屋代寺であるとされている(米山1982年)。佐久郡妙楽寺は佐久市下塚原の塚原古墳群に妙楽寺と同名の寺が存在するが、この寺の由来が不明であるため所在地とは断定できない。

明科廃寺

以上にあげた古代寺院跡のほかに、県内最古の寺院として明科廃寺があげられる。旧明科町中川手に所在する明科廃寺は1999年の調査で掘立柱建物跡3棟、雨落ち遺構、多数の瓦類が発見された。出土遺物は軒丸瓦・軒平瓦・鷗尾^{しび}・丸瓦・平瓦・瓦塔・土師器・須恵器・灰釉陶器・金属器などで、須恵器は7世紀後半以降のものである。丸瓦は玉縁のない行基式丸瓦である。屋根の棟先を飾る鷗尾は飛鳥時代に大陸から瓦の技術とともに伝わったもので、のちに鯨となった。瓦塔は、屋根・壁体・隅肘木・基壇の破片・水煙の一部が出土し、基壇の形状から八角形の塔とみられている。出土した瓦は岐阜県飛騨市の寿楽廃寺と山梨県甲斐市の天狗沢瓦窯跡から類例が出土している。

信濃の名神大社

信濃の官社(祈年祭のときに国から奉幣を与えられる神社)は『延喜式』神名帳によると、46社48座(大神7座・小神41座)ある。社数と座数が異なるのは、1つの社で2座祀られている神社があるためである。国家的問題が生じた時に、その解決を祈願するために行う名神祭に際し、国から奉幣にあずかるのが大の神である名神大社(明神大社)であった。南方刀美神社(諏訪大社)の祭神は、上社の南方刀美神(建御名方富命)と下社の八坂刀売神の2神である。上社前宮は茅野市、上社本宮は諏訪市、下社春宮・秋宮は共に下諏訪町に鎮座している。旧穂高町に所在する穂高神社の祭神は穂高見命・綿津見命・瓊々杵尊であり、この3座を穂高神1座とした、この地を領した安曇氏(族)の祖先神とされている。千曲市に所在する武水別神社は武水別大神を主祭神とし、菅田別命・息長帯比売命・比売大神を祀る。長野市に所在する健御名方富命彦神別神社の祭神は健御名方富命である。上田市に所在する生嶋足嶋神社の祭神は生嶋大神と足嶋大神の2座で、鎮座創建年代は不詳である。以上が信濃の7つの名神大社である。(齋藤・畠山)

第V章 穂高古墳群の調査

第1節 穂高古墳群の概要

穂高古墳群は長野県安曇野市の北西地域(旧南安曇郡穂高町域)を中心に分布している古墳時代後期の群集墳である。北アルプス東麓から松本平へ流れ込む沢によって形成された扇状地上におもに分布し、現存しているものや煙滅してしまったもの、記録のみが残っているものも含め87基以上の古墳が過去の調査により確認されている。

(1) 研究史

穂高古墳群に関する報告は明治時代からみることができる。1886年に報告された『長野縣町村誌』南信篇の「(南安曇郡)西穂高村」(現・安曇野市穂高柏原/牧)の項には「陵墓」として「安曇連大濱墓」ほか全9基が、「(南安曇郡)有明村」(現・安曇野市穂高有明)の項には「古跡」として「鬼ノ窟」の記述が確認でき(長野縣1936)、後者はD1号墳(魏石鬼窟)と推定される。当該地域には、記紀にも記されている安曇氏の北九州からの移住や『信府統記』にみられる坂上田村麻呂の八面大王討征の伝承が残されており、明治時代以前の人々の穂高古墳群に対する解釈をうかがい知ることができる。学術誌上において初めて報告されたのは1890年の鷹野秀雄氏によるもので、どの古墳かは特定できないが旧有明村内において20基~30基の古墳が発掘され、土器・鉄器・金環・勾玉などが出土したことを報告している。また、発掘者の証言にもとづいて作成した遺物の出土位置図と、村内出土の直刀3本・馬具の一部と思われる鉄製品1点の実測図もあげられている(鷹野1890)。1901年には増田謙吾氏が旧有明村内の古墳の分布図を示すと同時に、墳丘・石室形態の画一性と石室の開口方向が南を向く傾向を指摘している(増田1901)。明治時代に報告されている発掘例はほぼ副葬品目当てや石材採取などにとまなうものであったとみられ、学術的な調査が行われるようになるのは大正時代になってからの1918年の南安曇郡教育會によるB5号墳(金堀塚)の発掘調査(太田1923)以降である。

戦後には個々の古墳だけでなく、支群間での比較検討や群集墳としての性格解明に視点を置いた研究や調査が行われるようになる。戦前にも1921年3月に南安曇郡役所が旧有明村と旧西穂高村内に所在している古墳の墳丘測量値や発掘の有無などをまとめて長野県に報告したもの(太田1923)があるが、分布状況や支群構成を意識したものではなかったといえる。長野県では1941年から県内の歴史史料や考古資料の情報を収集・編纂する事業を進めており、旧穂高町ではその一環として1952年から藤沢宗平氏によって町内に所在する古墳の分布調査が行われた。この事業の成果である『信濃史料』では旧穂高町内の古墳を有明・穂高・西穂高の各地区にわけて報告し、そのうちの有明地区に所在している古墳をA~Dに分類している(長野史料刊行會1956)。藤沢宗平氏はその後1968年の『南安曇郡誌(新版)』で『信濃史料』で欠番となっていた古墳や新たに確認された古墳の情報を報告しているほか、有明・牧・塚原の地区ごとの最大・最小の墳丘実測数値と平均値をあげて直径26m以上の墳丘をもつ大型古墳が存在しないことを指摘している。また全体を「有明・牧古墳群」と「塚原古墳群」の二つに支群分類しているが、個々の古墳は「有明古墳群(A群~D群)」・「西穂高古墳群(A群・B群)」に分けて記述している(藤沢1968)。ただし両者ともに分類の基準は明確に記されていない。

1960年代になると旧穂高町内での大規模別荘団地の造成や開田工事にともなう分布・現状確認調査が相次いで行われた。1967年9月から翌年1月にかけて穂高町地区埋蔵文化財分布調査団を中心に実施された調査の成果をまとめた『国鉄複線化等開発地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書』では、個々の古墳の立地や状態、石室の実測数値、出土遺物などをまとめたうえで、保存の方法について指摘している。また、全体を「穂高古墳群」という一つの古墳群としてとらえ、おもに河川ごとにA群~G群に支群分類を行っている(長野県教育委員会1968)。1964年から1970年にかけて実施された穂高町教育委員会による調査では、墳丘・石室の実測数値と破壊状態などについてまとめたほか、遺構が確認できたものについてはコンクリートの標柱を設置し、写真による現状記録も行っている。この成果は『穂高町の古墳』と題する調査報告書として刊行されている(穂高町教育委員会1970)。

上記のような行政主導による調査が戦後しばらく続いていたが、1983年に筑波大学により研究機関を調査主体者とする本格的な学術調査が再開し、旧穂高町内5基・松川村1基の墳丘・石室・遺物実測調査と、宮内庁書陵部所蔵資料の実測調査が行われた。その結果から、穂高古墳群の形成時期を6世紀後半～7世紀後半と推定し、また石室の規模・形態をA類～C類に分類してそれをもとにA群～C群をさらに小支群に分類した。またここではD1号墳(魏石鬼窟)は単独墳として古墳群からは独立させている(岩崎・松尾・松村1983)。翌年の『長野県史』では従来のA群～G群に松川村所在の古墳をくわえて「穂高古墳群」として紹介している(河西・松尾1984)。

1988年、藤の木古墳(奈良県生駒郡斑鳩町)から町内出土の金銅製鳳凰形飾板と類似した鳥形の飾りが出土したことを受けて、旧穂高町の古墳も注目されるようになる。翌年に穂高町教育委員会から刊行された図録『穂高町の古墳群とその人々』では発掘調査による出土品や町内古墳出土と伝えられる遺物の写真を集成し、『穂高町の古墳』からおよそ30年ぶりに個々の古墳の概観的な現状を写真で報告している(穂高町・穂高町教育委員会1989)。1991年発行の『穂高町誌』では桐原健氏が1983年に筑波大学が行った石室規模・形態の分類をE・F群に対しても適応を試みたほか、支群ごとに集落遺跡と対応させ被葬者の居住地の推定を試みている(桐原1991)。また『穂高町誌』編纂に際し、三木弘氏によって1911年6月に発掘されたE6号墳(狐塚3号古墳)の出土遺物が実測調査された。その結果をもとに、古墳群の形成は6世紀後半から7世紀代にかけて行われたが、追葬は8世紀代まで続けられていたこと、馬具を例に古墳によって副葬品の内容に差異がみられること、各支群に規模の卓越する古墳が1基または2基あることなどが指摘された(三木1991)。同氏は1986年にも同様の経緯で発掘されたD1号墳(魏石鬼窟)の調査に携わり(三木ほか1987)、2006年にはその成果の再考とそれまでの穂高古墳群をめぐる研究成果の概観を通し、その範囲や形成時期、周辺集落との関係や被葬者の問題についてまとめている(三木2006)。

(2) 支群構成と分類・全体数

穂高古墳群の範囲や全体数、支群構成・支群名については研究者や調査者のとらえ方などにより様々な案・名称が掲示されており、定まったものはないが現状である。そこで本報告書作成にあたっては、以下にあげた点からあらためて定義・分類を行った。

1. 「穂高古墳群」は『信濃史料』(信濃史料刊行会1956)において分類されたA群～D群、『国鉄複線化等開発地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書』(長野県教育委員会1968)において分類されたE群～G群、『穂高町の古墳』(穂高町教育委員会1970)において分類されたH群、『長野県史』(河西・松尾1984)において旧穂高町地域に分布する古墳群を構成する一部とされた松川村所在古墳の以上によって構成される。
2. 従来古墳群全体を示す名称として多く用いられてきた「有明古墳群」という語については、A群～D群を指す場合と旧穂高町の古墳全体を示す場合の2通りの意味をもち、なおかつ松川村所在古墳を含める場合と含めない場合があることから、これを用いず「穂高古墳群」の名称に統一する。
3. 単独墳については現在までの研究上の習慣やG1号墳(上原古墳)のように周辺に未知の古墳が存在している(していた)可能性(重野2001ほか)を考慮して古墳1基のみで構成されていても「群」とする。
4. A群～G群は穂高古墳群を構成するそれぞれ独立した支群とし、いくつかの支群の総称として習慣上・便宜上用いられてきた「有明古墳群」「西穂高(牧・塚原)古墳群」などの名称は用いない。
5. 古墳の総数は『信濃史料』(信濃史料刊行会1956)以降、安曇野市埋蔵文化財包蔵地図(安曇野市教育委員会2010)までの文献において「所属支群を示すアルファベット+通し番号」の名称が確認できた87基(安曇野市内84基・松川町内3基)とし、「所属支群を示すアルファベット+通し番号」の表し方では確認できないものの記録上で存在が確認されているもの(例：狐塚第4・5号古墳)を考慮し「87基以上」と表記する。

(3) 支群ごとの概要

A群 油川沿いに分布する8基の円墳で構成される。1887年にA6号墳(犬養塚)が発掘されており(太田1923)、有明山神社の宝物として伝えられている遺物はこの際出土したものと考えられている(岩崎・松尾・松村1983)。同時期にはA7号墳(県塚)も発掘されている(太田1923)。1982年12月には筑波大学がA1号墳(陵塚)の墳丘と石室の実測調査と前述したA6号墳(犬養塚)出土遺物の実測調査を行い、さらにA群全体を2つの小支群に

分類している(岩崎・松尾・松村1983)。

B群 天満沢川沿いに分布する36基の円墳で構成される。1886年のB23号墳(祝塚)付近の古墳の発掘(太田1923)をはじめ、明治10年～20年代にかけてB2号墳などB群の数10基の古墳が発掘されており(鷹野1890)、宮内庁や東京国立博物館、有明山神社の一部の所蔵品はこの時期に出土したものとみられている(桐原1991)。1918年にはB5号墳(金堀塚)が南安曇教育會によって穂高古墳群ではじめて学術的な発掘調査がなされた(太田1923)。1982年12月には筑波大学がB1号墳(ぢいが塚)の墳丘と石室の実測調査とB23号墳(祝塚)出土遺物の実測調査を行い、さらにB群全体を4つの小支群に分類している(岩崎・松尾・松村1983)。

C群 富士尾沢川沿いに7基の円墳が確認され、C2号墳が調査されているが報告はなされていない。

D群 中房川左岸の山麓に位置する単独墳である。墳丘をもたず、巨大な花崗岩の一枚岩の下に石室が構築されている。1921年5月7日に踏査を行った鳥居龍蔵氏は須恵器片1点を採集したほか、その独特の形状から「ドルメン式古墳」とであると指摘し(鳥居1925)、翌年7月にはそれともなう宮坂光次氏による実測調査が行われた。宮坂氏は、他地域の形状の類似する古墳の例との比較などから古墳であることは確証したが、石室については盛土を施した古墳の変形したものであるとして鳥居氏の説を否定している(宮坂1922)。その後『穂高町誌』編纂に伴い、1986年9月13日～15日に長野県埋蔵文化財センターによって実測調査が、同年9月28日～10月5日には三木弘氏らによって鳥居龍蔵氏の報告以降初めて発掘調査がなされ(寺島・西山・三木1987)、修験道修行の場としての2次使用の痕跡も明らかになった(三木1990)。

E群 烏川と川窪沢川に挟まれた台地上に広範囲に分布する19基の円墳で構成される。1911年6月にE6号墳(狐塚3号古墳)が発掘されて多数の遺物が出土し、旧帝室博物館・穂高神社・満願寺に納められた(太田1923)。1951年には大場磐雄氏によってE7号墳(狐塚2号古墳)の発掘調査が行われている(藤沢1968)。

F群 烏川右岸に分布する10基の円墳で構成される。発掘調査は1975年8月5日～12日にかけて行われたF1号墳(一本杉古墳)のみである(中島1976)。1997年10月1日～24日に国営アルプスあづみの公園整備にともなう調査で古墳と思われる2基(仮称F11・12号墳)の発掘調査が長野県埋蔵文化財センターによって行われたが、石室などは認められなかった(百瀬1997)。

G群 烏川右岸に位置し、ここでは単独墳として扱うが周辺に未知の古墳が存在するかもしくは存在していた可能性も指摘されている(重野2001)。1930年5月24日・25日に猿田文紀氏による発掘調査が行われ、翌々年には今井眞樹氏が現地での調査と猿田氏の報告をもとに、平地を掘り込んだ地下に石廓を構築した地方独特の構造をもつ古墳との見解を示した(今井1933・栗岩1933)が、大場磐雄氏はこれを否定している(重野2001)。1982年12月には筑波大学により墳丘と石室の実測調査が行われた(岩崎・松尾・松村1983)。のち1999年1月11日～2月5日にかけて穂高町教育委員会により古墳の構築方法と周辺に古墳が存在するかどうかを探るための発掘調査が行われている(重野2001)。

H群 扇状地先端に構築された単独墳である。1986年に『穂高町誌』編纂に伴い墳丘の実測調査が行われた。墳丘上に祠が祀られ、墳頂部が平に削平されている。

松川村所在古墳 安曇野市の北側、松川村に所在する祖父が塚古墳・牛窪古墳・桜沢オカメ塚古墳の3基の単独墳からなる。祖父が塚古墳が1879年・1880年ごろに、牛窪古墳が1892年頃に発掘されたとされる(平林1988)。1983年12月の筑波大学による祖父が塚古墳の墳丘と石室の実測調査の結果、穂高町内に分布する古墳との石室構造の類似性が指摘され(岩崎・松尾・松村1983)、翌年の『長野県史』ではこれを踏まえて穂高古墳群を構成する古墳のひとつとして扱っている(河西・松尾1984)。

(参考)旧堀金村所在古墳 穂高古墳群を構成する古墳として認定されてはいないが、その可能性のある古墳が旧堀金村内に存在する。現在、須佐渡口古墳・岩原古墳・前の髪古墳・曲尾古墳群・古城下古墳が確認されており(安曇野市教育委員会2010)、うち須佐渡口古墳と岩原古墳については位置的な関係と立地条件から、F群を構成する古墳の一部であるとも考えられる。(久我谷)



第4図 穂高古墳群と周辺の古墳時代遺跡

安曇野市教育委員会2010をもとに作成。A2・A4・A5の位置は藤沢1963による。B14・B26・E15・E16・E18・E19の位置は不詳。なお、高瀬川を挟んだ対岸の池田町にも数基の円墳が存在するが、本図には示していない。

第2節 F9号墳・F10号墳の調査

(1) 調査地の概要

穂高古墳群は、松本平北西の安曇野市穂高地区を中心に分布している。西から東へ緩やかに傾斜する安曇平には、西方の北アルプスを水源とする烏川や中房川が東に向かって流れており、これらの川が南北に広がり複数の扇状地を形成している。穂高古墳群は、これらの扇状地上の標高600m～750mに点在している。築造当時は100基以上の古墳が存在していたと考えられており、分布状況からA群～H群・松川村所在古墳の9つの支群に大別されている。それらのうち10基の古墳からなるF群は烏川の右岸に位置し、その南と北には古代から中世にかけて開削された用水路である矢原沢と柏原沢が流れている。F群はこれらの沢に挟まれるかたちで、標高640m～680mの間に東西にほぼ直線状に分布している。F支群は、北方の柏原沢に沿うように築造されている。本調査の対象であるF9号墳とF10号墳はこの支群に属しており、標高660m付近の扇状地扇頂部に20mを隔てて築かれ、支群中もっとも標高が高い位置にある。F9号墳標柱は北緯36° 19′ 08″、東経137° 50′ 29″で、地籍は安曇野市穂高柏原3654にあたる。現在この周辺一帯は国営アルプスあづみの公園となっており、両古墳もその国営公園内に所在する。

1995年に約100haという広大な面積にわたって計画された国営アルプスあづみの公園掘金・穂高地区の建設とともに、F9号墳とF10号墳を含む一帯で試掘調査が行われた。両古墳の間の土地は旧穂高町の上水道の配水池となっていたため、工事の際に水源地を移設する計画であったが、古墳自体は現状保存することが決定していた。そのため、この2基については早急な調査の必要はないと判断され、F9号墳・F10号墳に続く未知の古墳の存否確認が主な目的となった。この調査では、古墳の石室の可能性のある石積み1基と、古墳の墳丘と考えられるマウンドが確認され、それぞれF11号墳、F12号墳と命名された。翌年、あらためてこれらの遺構の発掘調査が行われ、前者は近世の土地開拓における集石遺構であり、後者は自然地形の高まりであることが判明している(長野県埋蔵文化財センター編1997)。

現在のF9号墳・F10号墳は公園の遊歩道に囲まれ、周りには木々が生い茂っている。F9号墳は墳丘の南西側が崩れ、石室部分が崩落している。F9号墳の墳頂部の2個の大型礫には、直径5cm程度の穴が1か所ずつみられるが、これはかつてこの墳頂部にあった祠に付属していた鳥居の礎石と考えられる。大正12年の『有明村誌』によれば、「二ツ塚 柏原の塚原に在り。二個の塚が伴立せる故其の名あり。甲は縦四丈九尺、横三丈八尺、高さ六尺、乙は縦横共三十九尺、高さ八尺、何れも石槨完全なり。甲の塚上に小祠あり、諏訪明神を祭れるなりと云ふ。初は塚主の霊を祭りしも神社名混乱の時代に諏訪明神に轉化したるものなるか、将た後人唯單に墳丘を利用して己の信仰する諏訪明神を奉齋せしものなるか、いづれにするも、塚若し霊あらば歎く所あるべし」とある。(宮坂編1923) 1970年時点ではまだ祠は存在していたようで、それは当時の写真からも確認することができる(穂高町教育委員会1970)。現在この祠は消失しており、いつ取り払われたのかは不明である。一方、F10号墳は比較的保存状態が良好で、墳丘は円墳の形状を良く残し、石室の一部が露出している。(伊藤)

(2) 調査の方法

本調査では、F9号墳とF10号墳の各墳丘測量図の作成と、光波測距儀による墳丘および古墳周辺の地形測量を行った。まず、基準点の原点として三等三角点「牧」(標高665.420m)から原点移動を行い、F9号墳とF10号墳の中間地点に基準点O1(665.000m)を設置した。その後O1を基準とし、両古墳を囲うかたちでH1(665.391m)、H2(665.343m)、H3(665.140m)、H4(663.855m)、H5(663.395m)、H6(664.636m)、H7(664.409m)の7本の杭を設置した。これにF9号墳とF10号墳のそれぞれの標柱(664.784m・664.439m)をくわえた計10点を、墳丘測量の際の基準点とした。

これと並行して、両古墳の調査前写真の撮影および各墳丘の除草作業を行った。除草作業は、国営公園の敷地内ということで慎重に行われた。草は地表面から約5mmの部分で芽切りをし、落ち葉を取り払った。墳丘上には数本の木や切株があったが、国営公園内のものであるため切ることとはできず、現状のまま残すこととなった。除

草作業終了後の写真撮影完了後、各古墳で10cm間隔の等高線上に竹串を打ち、そのラインをそれぞれ2台の平板測量機を使用して測量し、同時に墳丘上の礫の測量も行った。このときの縮尺は1/30としたが、当報告書の図面は縮尺1/100で作成した。

光波測距儀では、平板測量の不足を補うことを考慮して並行して墳丘の測量を行い、くわえて両古墳周辺の地形測量も行った(第6図)。また、各基準点や標柱および各墳丘の墳頂の標高も測定した。墳頂部の標高はF9号墳が665.292m、F10号墳が666.732mである。

しかし、このときの調査では平面座標の設定にまで至らなかった。そのため有限会社メディオにGPS測量を依頼し、10月31日から11月1日にかけて再度調査を行い、F9号墳の南約120m地点と、同東南約400m地点にそれぞれ国家座標であるH8(664.773m)とH9(659.731m)の2点を設定したのち、標柱の座標値も算出した(第5図)。

なお、O1とH1～H7の木杭は、本調査終了後に撤去したため、今後の基準点は各標柱とH8、H9となる。

また、光波測距儀の図面との整合性を確認するため、2010年5月16日から17日にかけて再度調査を実施し、F9号墳の標高663.800mから664.200m地点を10cm間隔で改めて測量した。この際、F10号墳では方角や標柱の位置確認を行った。そして両古墳の本調査の図面との照合により、今回の図面の完成に至った。(伊藤)

(3) F9号墳の調査

調査方法

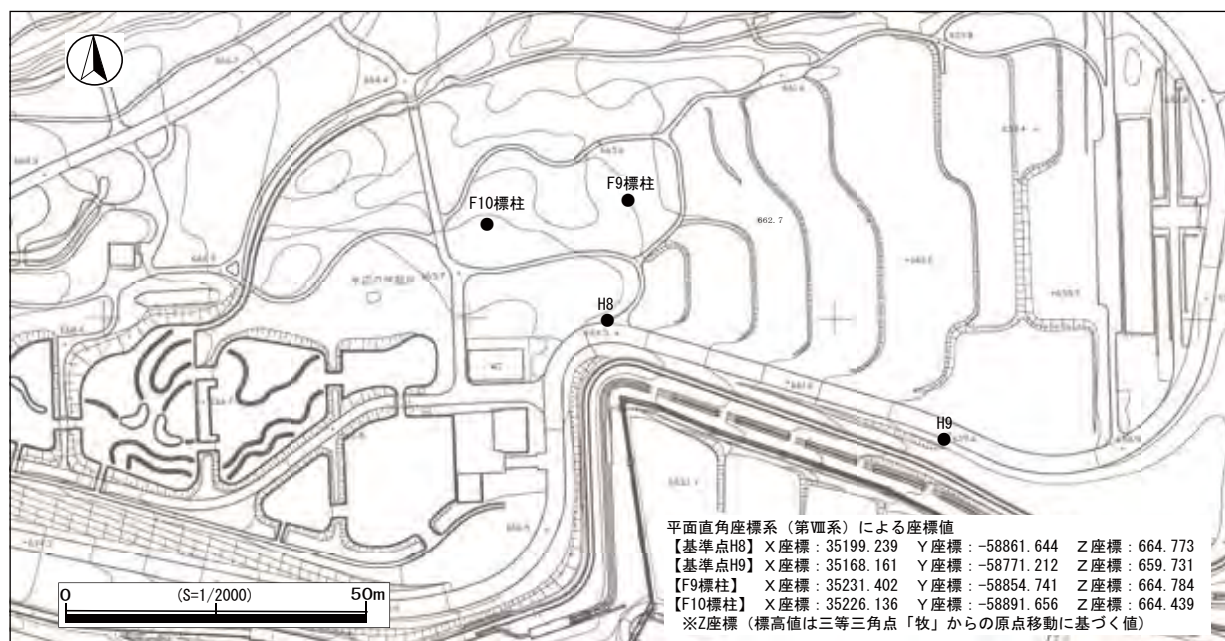
平板測量を行い、墳丘測量図を作成した。図面作成にあたり、平板測量機のポイントとして西側にN1(664.782m)・東側にN2(664.782m)を設定し、測量の際の基準点として、H6と標柱を使用した。

墳丘

測量調査の結果は、第7図のとおりである。本墳は西から東への緩やかな傾斜面に築かれている。標高では東664.300m、西663.800m地点が墳裾変換点であると判明し、東西の比高差は0.60mとなる。墳頂は墳丘の中心から若干北にずれ、墳丘の北東側は旧状をとどめている。南西側においては崩落の跡がみられ、遺存状態は良好とはいえない。現状から想定すると、直径約13m、高さ約1.7mの円墳であると考えられる。

石室

本墳は主軸をおおむね南北に取り、N-14.5°-Wである。墳丘上には石室で使用されていたと思われる長さ83cm・幅64cm・厚さ31cm程度の礫が散在しており、さらに墳頂部の2つの礫には祠があったときの鳥居跡と、思



第5図 測量基準点の位置と座標値

われる直径5cmの穴がそれぞれ開いている。また、礫が墳丘上の北から南側に八の字に散在していることから石室の開口方向は北から南へ八の字方向へ広がると考えられる。

石室形態は現状では不明であるが、使用されている礫についてはF群が位置する烏川流域からは花崗岩が採取され、他支群においてもそれらの礫が使用されていたことが確認されている。F9号墳もその例外ではなく、石室に花崗岩の自然石が使用されている。(小宮)

(4) F10号墳の調査

調査方法

平板測量を行い、墳丘測量図を作成した。まず、平板ポイントとして北側にN4(666.615m)、南側にN5(666.466m)を設定した。続いて、平板・スタッフ・レベルを使用し、墳頂部の標高666.600m地点から墳裾部の標高665.000m地点までを10cm間隔で測量した。この際、基準点としてH1・H2を使用し、これに標柱をくわえた。

墳丘

本墳は平坦面に築かれており、墳丘は北側から南側に向かって緩やかに傾斜している。長径12.9m、高さ1.8mの円墳である。墳頂は若干北にずれ、東側は崩れが目立つが、西側は旧状をとどめている。標高東665.000m、同西665.100m地点が墳裾変換点であり、墳裾部は東側と西側で約0.10mの比高差がある。

石室

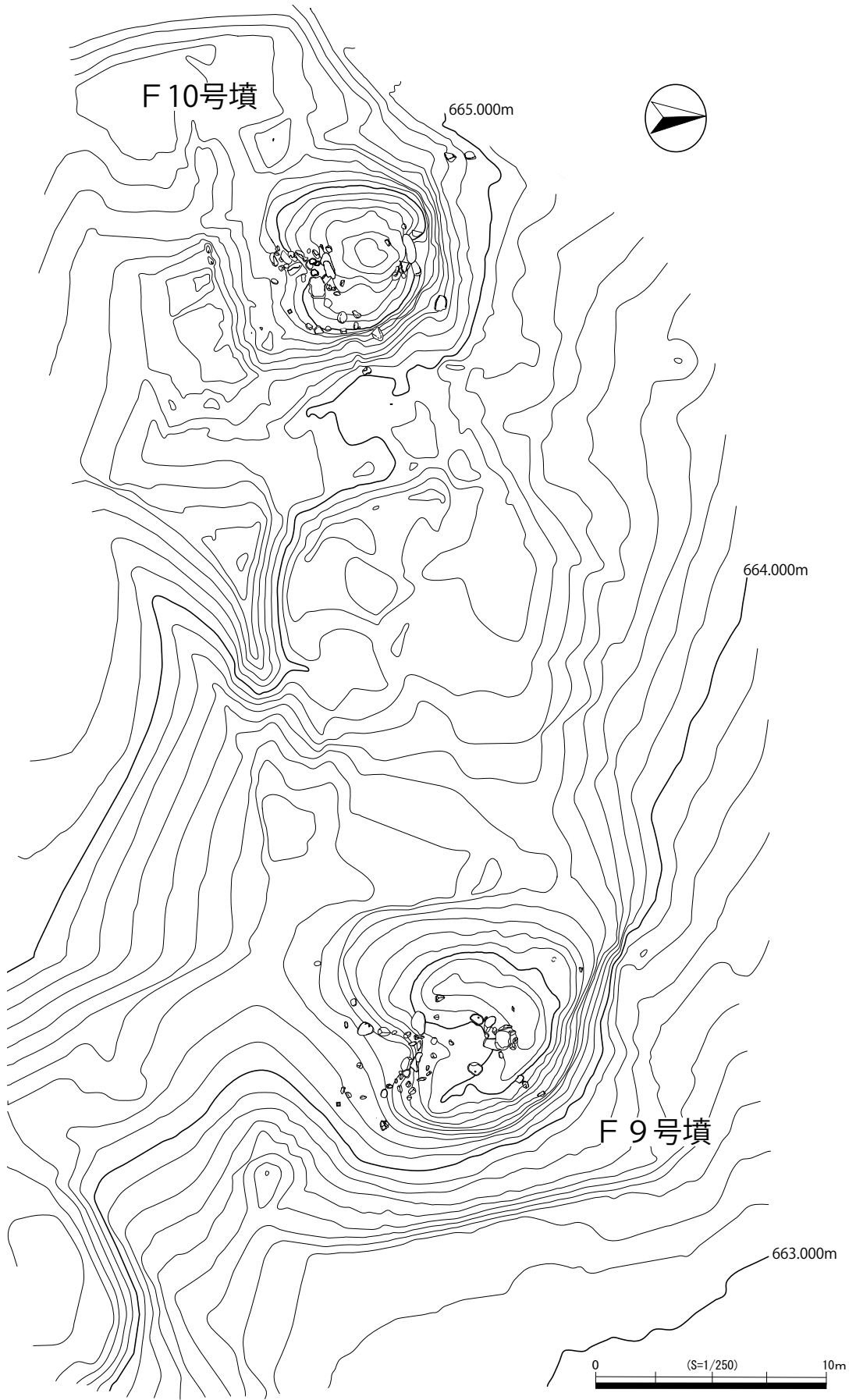
本墳の主軸はおおむね南北に取る。石室南橋の天井石が1枚確認でき、周囲には、羨道の一部であったと思われる礫が散在することから羨門の一部と思われる。現状での羨道の長さは2.1m、内測3.2mと考えられる。北端でも、天井石1枚を数え、南南西に20°開口する盗掘痕もみられることから、奥壁はその際に失われたか、あるいは築造当初から存在しなかったと想定されるが不明である。北側開口部から見る限り、石室があると思われ、その内部は土砂の流入が著しい。現況床面は奥壁に向かって傾斜しており、20cm前後の礫が認められる。天井石は『穂高町の古墳』では6枚と記述しているが、現在確認できるのは上記の2枚のみである。南端の天井石は長さ縦115cm、幅44cm、厚さ40cm、北端の天井石は長さ120cm、幅30cm、厚さ50cmである。また、羨道と思われる石室南側の礫は、特に南西部ではほぼ一直線状をなすのに対し、南東部は墳裾に向けて散在している。これらの礫のいくつかは旧状を留めている。石材は花崗岩を使用しており、大多数は白みがかかった灰色で丸みを帯び、感触はざらざらしているが、石室南端付近では一部に割石も認められ、形状は不揃いである。

(5) 小結

両古墳についてまとめると、F9号墳の墳丘規模は直径17.0m、高さ1.32mの円墳、F10号墳の墳丘規模は長軸12.9m、高さ1.8mの円墳で、南南西に開口する横穴式石室と思われる。

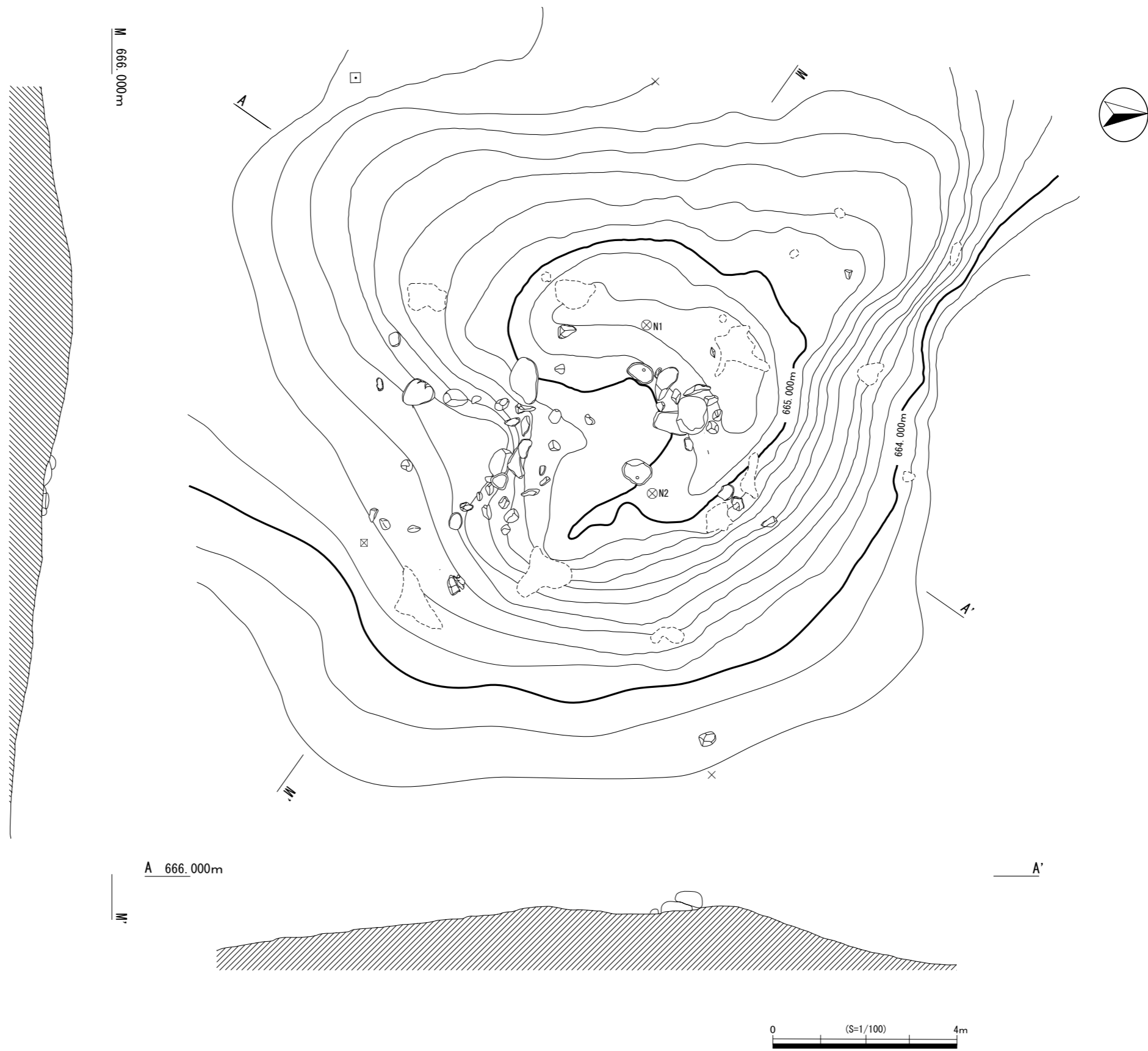
光波測距儀により測量を行った第6図から見たF9号墳とF10号墳は、前者の高さは後者に比べて低く形状が崩れているため、現在は裾広がりな円形をしていることがわかるが、築造当時は現在と比べて高さがあったと考えられる。一方、後者は墳丘の残りがよく高さもあり、前者の形状に対し、まとまりをみせた円形をしている。現在、両古墳の中間地点は開けており草が茂っているが、以前は上水道の配水池として用いられていた。O1周辺が、その痕跡と思われる。

今年度は國學院大學考古学研究室としてF9号墳・F10号墳ともに初めての調査であった。本調査では墳丘測量のみの調査であったため、明らかにできたのはごく一端であったが、来年度以降はこの測量調査の成果を基盤とし、発掘調査により古墳の内部主体を明らかにすることが課題となる。(長谷川・矢花)



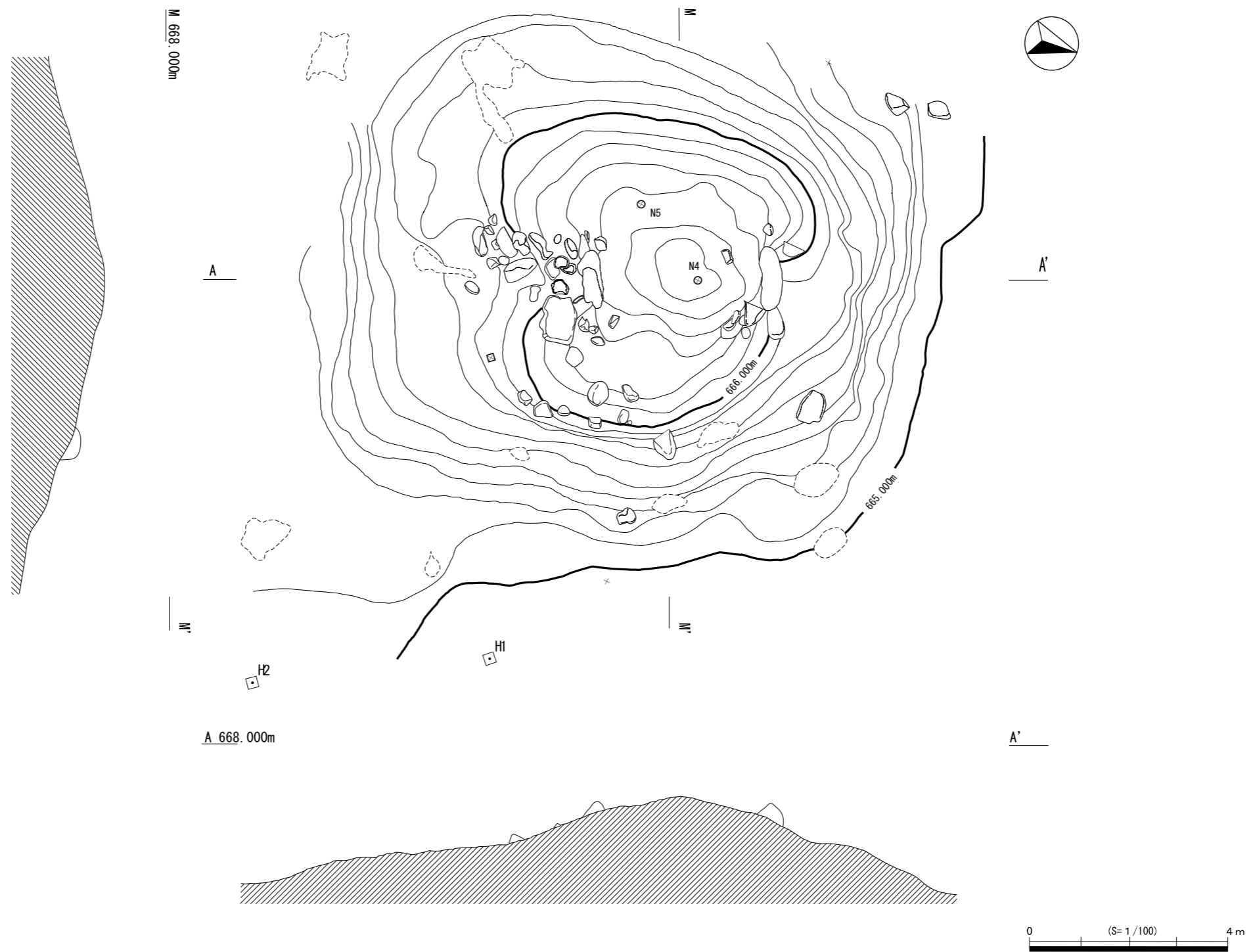
第6图 F 9号墳・F10号墳全体图

凡 例	
⊗	平板ポイント
×	填裾変換点
⊠	標柱
□	BM(H6)
○	木

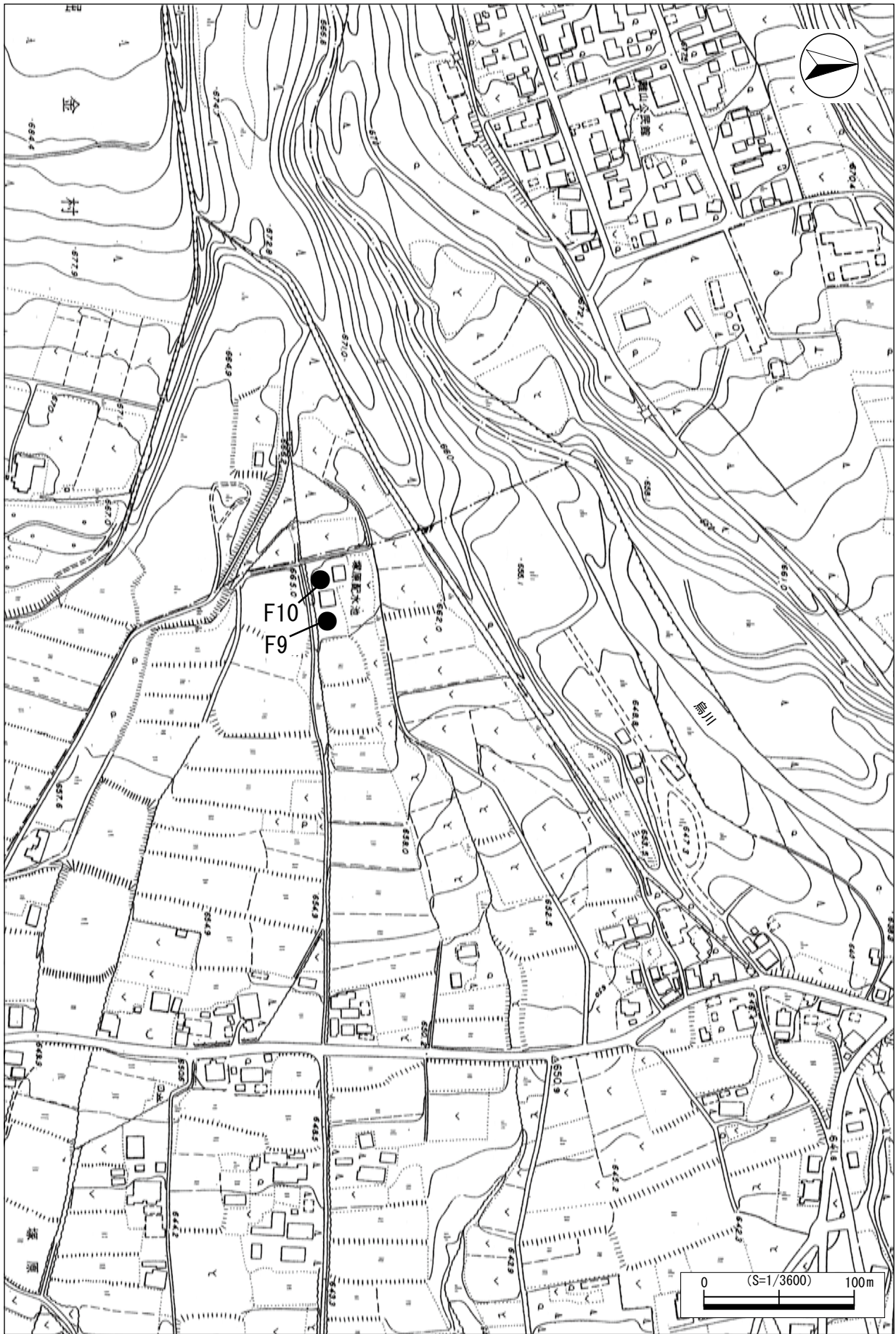


第7図 F9号墳平面図・見通し図

凡 例	
⊗	平板ポイント
×	墳裾変換点
⊠	標柱
□	BM(H1・2)
○	木



第 8 図 F10号墳平面図・見通し図



第9図 F9号墳・F10号墳周辺旧地形図(1992年時)
 「堀金村基本図Ⅷ-IC 85-1」(1989年測量・1992年修正測量)に加筆

第3節 現状確認調査

(1) 調査の内容

今年度調査では、F 9号墳・F 10号墳の墳丘測量調査と並行して他の古墳の現状確認調査を実施した。穂高古墳群全体もしくは町村ごとの古墳の現状を調査・記録したものは1921年の南安曇郡役所による報告(大田1923)以来7度なされているが、19年前の『穂高町史』(桐原1991)を最後に行われていない。そのため、過去の状況とは少なからず変化が生じているものと思われる。そこで今回の調査では個々の古墳の現在の状況を記録していくことによって過去の調査・報告よりどのように変化しているのかを明らかにし、加えて穂高古墳群について広く認知してもらい、後世に残し伝えていく足がかりにしていくことを目的とした。

調査対象とした古墳は墳丘測量調査を行ったF 9号墳・F 10号墳の所属するF群と、烏川を挟んでその北側に分布するE群を構成する全ての古墳であった。しかし、悪天候に見舞われE群については全てを調査することができなかった。調査は以下の2日間で計12基について実施した。

8月7日(金) F 1号墳・F 2号墳・F 3号墳・F 4号墳・F 5号墳・F 6号墳・F 7号墳

8月8日(土) F 8号墳・E 1号墳・E 9号墳・E 10号墳・E 11号墳

(2) 調査の方法

調査の方法は、今回の調査のために「現状確認調査カード」を作成し、その項目に基づいて記録を行った。設定した項目は

①地籍 ②立地 ③墳丘(東西径・南北径・高さ)④石室 ⑤石材(縦・横・厚) ⑥総括

の6項目で、第3項「調査の結果」ではその項目に従って記述する。ただし石室についてはいずれも年月の経過による破壊や消失により計測が不可能な状態であったため、記載を省略した。代わりに墳丘上に散在あるいは2次使用されている石室に使用されていたと思われる石材の情報を報告する。またこの調査結果は第1表「穂高古墳群一覧表」に反映させている。

(3) 調査の結果

《E群》

E 1号墳(西牧塚)

①地籍 安曇野市穂高牧1898

②立地 扇頂部

③墳丘 径：東西10.65m・南北12.30m 高さ：東1.00m・西0.80m・南1.10m・北0.80m

⑤石材 5点 (75cm・30cm・20cm) (40cm・80cm・30cm) (90cm・50cm・35cm) (80cm・50cm・不明) (80cm・50cm・不明)

⑥総括 畑に囲まれた耕作放棄地に残存する。墳丘の残存状態は比較的良好だが円墳の四隅・墳頂部は削平されており、残存径から考えても本来は現状よりも1mほど高かったのではないかとと思われる。石材が墳丘上に散在しており、そのなかには90cmを超える石もあることから石室石材として利用された可能性がある。現在石室は消失している可能性が高い。

E 9号墳(三郎塚)

①地籍 安曇野市穂高牧948-6

②立地 扇頂部

③墳丘 規模不明

⑤石材 不明

⑥総括 神社境内にある。1991年時の調査時点ではわずかではあるが墳丘を確認することができたようだが、今回においては墳丘・石室ともに残存状態を確認することができなかった。

E 10号墳(寺島塚)

- ①地籍 安曇野市穂高牧916
- ②立地 扇頂部
- ③墳丘 径：東西5.60m・南北8.00m 高さ：0.90m
- ⑤石材 3点 (120cm・80cm・30cm)(105cm・35cm・30cm)(80cm・40cm・25cm)
- ⑥総括 寺嶋神社境内にあり、社の北側に盛土が認められる。宅地造成により墳丘の西側は平坦になり、北側は墳丘ごと掘り下げられている。また1991年には1.50mあった高さが90cmまで縮小しており、年月の経過により盛土が流れてしまっているものと思われる。墳丘上南側に80cm～120cmまでの大型の石が3点と、石碑として使われているもの9点があり、これらは石室石材として利用されていた可能性がある。

E 11号墳(神谷塚)

- ①地籍 安曇野市穂高牧1320-2
- ②立地 扇頂部
- ③墳丘 径：東西5.30m・南北7.00m 高さ：1.00m
- ⑤石材 3点 (70cm・40cm・35cm)(60cm・35cm・不明)(60cm・20cm・不明)
- ⑥総括 盛土・石室は確認できなかった。墳丘上には多量の石が方形に積まれており石の大きさに統一性はみられないが、下部には石室石材に使用できそうなものもある。中央からやや南東に祠が存在する。

《F群》

F 1号墳(一本杉古墳)

- ①地籍 安曇野市穂高柏原2757-1
- ②立地 扇頂部
- ③墳丘 規模不明
- ⑤石材 不明
- ⑥総括 道路工事のため墳丘・石室ともに破壊されており、残存部分の確認をすることはできなかった。

F 2号墳

- ①地籍 安曇野市穂高柏原4290-1
- ②立地 扇頂部
- ③墳丘 径：東西5.00m・南北7.20m 高さ：北0.80m・東0.90m
- ⑤石材 4点 (140cm・80cm・30cm)(135cm・80cm・30cm)(90cm・80cm・25cm)(80cm・80cm・20cm)
- ⑥総括 畑と住宅の間にあり、古墳の西側は畑を区画する際に掘り下げられたものと考えられる。墳丘上には80cm～140cmの大型の石が4点あり、これらは天井石として使用されていた可能性がある。墳頂部にも「天満宮」・「奉納秩父板東供養」と彫られた2つの石碑が建てられているほか、墳丘前にも「大黒彫り(絵)」・「道祖神」・「二十三夜」・「庚申塔」と彫られた石碑が4つ建てられているが、これらの石碑に使用されている石は墳丘上の石と材質や大きさが異なるため、ほかの場所から運ばれてきたものと考えられる。

F 3号墳

- ①地籍 安曇野市穂高柏原4325
- ②立地 扇頂部
- ③墳丘 径：東西8.50m・南北9.80m 高さ：北0.90m
- ⑤石材 4点 (100cm・85cm・不明)(80cm・60cm・30cm)(85cm・40cm・20cm)(80cm・45cm・不明)
- ⑥総括 周囲が水田に囲まれた休耕地内に残存しているが、地権者の方の話によると以前はその周りで耕作を行っていたといい、現在と比較して2m程大きかったとのことである。墳丘上には最大で約100

cmの大型の石が4点確認でき、石室石材として使用されていた可能性がある。その一部は割られた状態で散在しているが、耕作中に石が出てくる度に割って墳丘上に置いていたとのことなのでそのためと思われる。刀などの副葬品が明治時代に掘り起こされて出土したとされるが、死人が出るなど不幸が続いたため、全て埋め戻したという。そのため石室の詳細は不明である。

F 4号墳

- ①地籍 安曇野市穂高柏原4260
- ②立地 扇頂部
- ③墳丘 径：東西8.20m・南北11.30m 高さ：不明
- ⑤石材 不明
- ⑥総括 耕作放棄地内にあり、墳丘は残存しているものの、西側が宅地化によって改変されたため墳頂から住宅基礎にかけて平坦化している。1991年調査と比較すると東西径約2.20m、南北径5.80m拡張している。石室については未発掘のため詳細は不明である。

F 5号墳

- ①地籍 安曇野市穂高柏原4070
- ②立地 扇頂部
- ③墳丘 径：東西10.70m・南北13.50m 高さ：1.00m
- ⑤石材 1点（59cm・43cm・15cm）
- ⑥総括 田畑に囲まれ墳頂部に石材が並んで置かれているが、以前あった位置から移動されている可能性がある。石室は破壊されており詳細は不明である。

F 6号墳(中上古墳)

- ①地籍 安曇野市穂高柏原4054
- ②立地 扇頂部
- ③墳丘 規模不明
- ④石室 縦6.60m・横0.90m・高さ0.65m
- ⑤石材 1点（105cm・60cm・30cm）
- ⑥総括 水田のなかの方形に区画された島状の土地にある。墳丘上には「元塚大神／文政元寅年三月五日御免名主御免中嶋平十郎建」と書かれた石碑がある。100cmを越える大型の石があり、石室石材として使用可能と思われる。石室は石積みがされているが、南西部は石積みが崩壊している。石材は後世に再構築された可能性がある。

F 7号墳

- ①地籍 安曇野市穂高柏原4060イ
- ②立地 扇頂部
- ③墳丘 径：東西11.00m・南北11.10m 高さ：1.25m
- ⑤石材 2点（85cm・45cm・20cm）(80cm・45cm・不明)
- ⑥総括 墳丘は残存しているが削平されて方形になっており、南西側は土が流れてしまっている。石は北側に集中しており、元の位置から移動している可能性がある。

F 8号墳

- ①地籍 安曇野市穂高柏原3692-1
- ②立地 扇頂部
- ③墳丘 規模不明
- ⑤石材 不明
- ⑥総括 真横に県道が通り、周辺は田畑に囲まれている。墳丘・石室ともに消失している。（小宮・佐瀬）

古墳名	別称	地籍	立地	外部施設		内部施設				調査年月日・内容・主体者				
				墳形	径(m)	高(m)	形式	開口方位	平面形	断面形	長(m)	幅(m)	高(m)	
A 1	みさきづか 陵 塚	安曇野市穂高 有明2111	扇頂部	円	(長)16 (短)14	2.1	横	S70° E	羽子板形	持送り	(羨)0.56 (玄)7.58	(羨)0.8 (玄)1.8	10.6 (玄)1.22	1982.12.・墳丘石室実測調査・筑波大学 馬具・土師器・須恵器
A 2		安曇野市穂高 有明8963付近	扇頂部	円	4(推)		横	S20° E						
A 3		安曇野市穂高 有明7345-29	扇頂部	円	7(推)		横	SE			4(推)	1(推)		土師器・須恵器
A 4		安曇野市穂高 有明7345	扇頂部	円	(長)10.8 (短)7.4	1.2								
A 5		安曇野市穂高 有明7345	扇頂部	円	(長)6.6	0.6								
A 6	いはいづか 犬養塚	安曇野市穂高 有明7348-2	扇頂部	円	13	1.8	横	S30° W			7.2	1.45	1.1	1987・発掘・不明/1982.12.・遺物実測調査・筑波大学 須恵器・勾玉・管玉・小玉・切子玉・金環・馬具・直刀・鉄鎌
A 7	あがたづか 泉 塚	安曇野市穂高 有明7348	扇頂部	円	14	1.55	横	S25° E			8.3	(上)1.2 (下)1.5	1.1	明治20年代・発掘・不明
A 8		安曇野市穂高 有明2111	扇頂部											尾錠・金環・切子玉・土師器・須恵器
B 1	ぢいづか 祖父塚	安曇野市穂高 有明2179-1	扇頂部	円	36	30	横	S 3° W	羽子板形	持送り	(北)2.3 (南)3.8	(上)0.85 (下)2.5	1.95	1982.12.・墳丘石室実測調査・筑波大学
B 2		安曇野市穂高 有明2188-2	扇頂部	円	10	2.1								明治20年代・発掘・不明
B 3	もらじづか 連 塚	安曇野市穂高 有明3716	扇頂部	円	15	2.3	横	S22° E			6.4	(上)1.1 (下)1.7	0.9	
B 4		安曇野市穂高 有明2189-1	扇頂部	円	15.2	2.7	横	S12° W			10.2	1.7	2.3	
B 5	かねづか 金堀塚	安曇野市穂高 有明2190	扇頂部	円	(長)15.65 (短)12	1.5	横	S 0°			8.6	1.65	1.5	1918・発掘調査・南安曇教育會 須恵器・鉄鎌・金環・茶碗型陶器片・管玉・勾玉・小玉・馬具・直刀
B 6		安曇野市穂高 有明2190	扇頂部	円	12.55	0.8	横	S20° E			7.55	(前)1.4 (後)1.2	0.8	
B 7		安曇野市穂高 有明2190	扇頂部	円	8.4	0.8	横	S30° E			5.05	1.4	0.8	
B 8		安曇野市穂高 有明2191-1-5	扇頂部	円	8.3	0.8	横	S30° E			5.15	1.45	0.8	
B 9		安曇野市穂高 有明2191-1-5	扇頂部	円	9.62	0.9	横	S30° E			5.95	(前)1.8 (後)1.3	0.9	
B 10		安曇野市穂高 有明2216-1	扇頂部	円	(長)18.0 (短)14.8	1.8	横	S10° E		持送り	9	(上)1.4 (下)2.4	1.45	

表 1-1 穂高古墳群一覽表(A 1 号墳~A 8 号墳・B 1 号墳~B 10 号墳)

古墳名	別称	地籍	立地	外部施設			内部施設				調査年月日・内容・主体者 出土遺物			
				墳形	径(m)	高(m)	形式	開口方位	平面形	断面形		長(m)	幅(m)	高(m)
B11		安曇野市穂高 有明2215-口	扇頂部	円	9	5	横	S20° E			9	1.5	0.4	
B12		安曇野市穂高 有明2215-口	扇頂部	円	8.0(推)	1.5(推)	横	S10° E				1.55		
B13		安曇野市穂高 有明2186-1-3	扇頂部	円	12	1.7	横	S10° E			8.5	(前)1.7 (後)1.1	(東)0.9 (西)1.2	
B14		安曇野市穂高 有明2186内	扇頂部	円	11	1.5	横	S40° E			7.6	(前)1.8 (下)1.5	0.8	
B15		安曇野市穂高 有明2186-1-4	扇頂部				横	S30° E			7	1.5	1.5	
B16		安曇野市穂高 有明2186-1-2	扇頂部	円	11	1.53	横	S20° E			7.5	(上)1.3 (下)1.8	1	
B17		安曇野市穂高 有明2186-1-2	扇頂部	円	(長)18.0 (短)14.8	1.8	横	S10° E			5.5	1.5		
B18		安曇野市穂高 有明												
B19		安曇野市穂高 有明2186-1-2	扇頂部	円	9	5	横	S20° E						
B20		安曇野市穂高 有明2186-1-2	扇頂部	円	8.0(推)	1.5(推)	横	S10° E			4(推)			
B21		安曇野市穂高 有明2186内	扇頂部	円	12	1.7	横	S10° E						
B22		安曇野市穂高 有明2186内	扇頂部	円	11	1.5	横	S40° E						
B23	はふりつみ 祝塚	安曇野市穂高 有明2186-1-2	扇頂部	円			横	S30° E			4	1.8		1982.12・出土遺物実測調査・筑波大学 直刀・馬具・金環・勾玉・切子玉・須恵器・土師器
B24		安曇野市穂高 有明2186-1-2	扇頂部	円	11	1.53	横	S20° E			5.5			
B25		安曇野市穂高 有明2186-1-2	扇頂部	円	6.5	1.5	横	S35° E			5	1.5		
B26		安曇野市穂高 有明2186内	扇頂部	円	6.5	1.5								
B27		安曇野市穂高 有明2186-1-2	扇頂部				横	S20° E			7	2		
B28		安曇野市穂高 有明2186-1-2	扇頂部				横	S10° E			4.8			
B29		安曇野市穂高 有明2176	扇頂部	円	14.3	1.3	横	S25° E			8.5	1.5		

表 1 - 2 穂高古墳群一覽表(B11号墳~B29号墳)

古墳名	別称	地籍	立地	外部施設			内部施設				調査年月日・内容・主体者 出土遺物			
				墳形	径(m)	高(m)	形式	開口方位	平面形	断面形		長(m)	幅(m)	高(m)
B 30		安曇野市穂高 有明7319	扇頂部				横	S37° E			4.5	1.25		
B 31		安曇野市穂高 有明2248-1	山腹				横	S50° E			6	(上)1 (下)1.1	0.6	
B 32		安曇野市穂高 有明3456	山腹				横				6.6	1.5		
B 33		安曇野市穂高 有明2188 - 2	扇頂部	円	9.5		横				5.5	1.65		
B 34		安曇野市穂高 有明7319	扇頂部	円	10		横				5	1.2	1.2	
B 35		安曇野市穂高 有明	扇頂部											
B 36		安曇野市穂高 有明	扇頂部											
B 37		安曇野市穂高 有明												
C 1		安曇野市穂高 有明3629-5	山腹	円	(長)18.5 (短)11.7	2	横	S10° E			7.2	1.45	0.9	
C 2		安曇野市穂高 有明3729-1	山腹	円	11	1.3	横	S35° E			6	1.25	1.1	
C 3		安曇野市穂高 有明3629-5	山腹	円	10.5	1.44	横	S25° E			7	1.7		
C 4		安曇野市穂高 有明3627-3	山腹	円	(短)9.1 (長)14.27	1.43	横	S20° E			3.3	1.5		
C 5		安曇野市穂高 有明3729-2	山腹				横				5.3	(前)1.5 (後)1.2	1.6	
C 6		安曇野市穂高 有明												
C 7		安曇野市穂高 有明												
D 1	にしきのか 魏石鬼窟	安曇野市穂高 有明268	山腹				横	S68° E			(玄)4.36 (羨)0.57	(前)1.67 (後)2.7	(奥左)1.94 (奥右)2.55	※1 須恵器・馬具・金環・近世遺物
E 1	にしきのか 西牧塚	安曇野市穂高 牧1898	扇頂部	円	(南北)10.65 (東西)12.3	0.8~1.1								
E 2	きびのつみ 三郎塚	安曇野市穂高 牧1840	山腹	円	14	1.4	横	S20° E			2	1.3	1.2	
E 3	にしきのか 十二蔵西墳	安曇野市穂高 牧2055	扇頂部				横	S50° E			5	1.3		

表 1 - 3 穂高古墳群一覧表(B 30号墳～B 37号墳・C 1号墳～C 7号墳・D 1号墳・E 1号墳～E 3号墳)

古墳名	別称	地籍	立地	外部施設		内部施設				調査年月日・内容・主体者 出土遺物			
				墳形	径(m)	高(m)	形式	開口方位	平面形		断面形	長(m)	幅(m)
E 4	かまづか 鎌塚	安曇野市穂高 牧116	扇頂部	円	10	1.3							土師器
E 5	しょうにんづか 上人塚	安曇野市穂高 牧200	扇頂部	円	12	2.3							
E 6	きつねづか 狐塚3号古墳	安曇野市穂高 牧14	扇頂部	円	(長)20 (短)16.6	3.5	横	S20° E		5	1.5		1911.6・発掘・不明 土師器・直刀・鉄鎌・勾玉・管玉・明子玉・金環・青銅・鈕・須恵器・馬具
E 7	あらいづか 狐塚2号古墳	安曇野市穂高 牧15	扇頂部	円	15	3	横	S15° E		5	2.1	1	1951・発掘調査・大場警雄 直刀・刀子・鉄鎌・鏢・耳環・金環
E 8	きつねづか 狐塚1号古墳	安曇野市穂高 牧29	扇頂部	円	15	3							
E 9 (跡E 3)	まえだづか 前田塚	安曇野市穂高 牧948-6	扇頂部	円	5	1							
E 10 (跡E 2)	てらしまづか 寺島塚	安曇野市穂高 牧916	扇頂部	円	(南北)5.6 (東西)8	0.9							直刀・勾玉
E 11 (跡E 1)	かみやづか 神谷塚	安曇野市穂高 牧1320-2	扇頂部	円	(南北)5.3 (東西)7	1							
E 12 (跡E 4)	はまぼづか 浜塚1号古墳	安曇野市穂高 牧318口	扇頂部										勾玉・管玉・切子玉
E 13 (跡E 5)	はまぼづか 浜塚2号古墳	安曇野市穂高 牧317-1	扇頂部	円	10(推)								直刀・須恵器
E 14 (跡E 6)	はなれやま 離山1号古墳	安曇野市穂高 牧2193	扇頂部	円	10	1							
E 15	はなれやま 離山2号古墳	安曇野市穂高 牧2194	山腹	円	10								
E 16	よろいづか 鎧塚	安曇野市穂高 牧1652-1	山腹										
E 17	しょうしほうでん 少将廟跡	安曇野市穂高 牧1884	扇頂部	円	6.3	0.6							直刀・人骨
E 18	はなれやま 離山3号古墳	安曇野市穂高 牧2194-1	山腹										
E 19		安曇野市穂高 牧	扇頂部										
F 1	いっぽんまへ 一本杉古墳	安曇野市穂高 柏原2757-1	扇頂部	円	4	0.5	横	SE		2.9	(後)1 (中)1.6	1.25(推)	1975.8.5～12・発掘調査・穂高町教育委員会 須恵器・人骨
F 2		安曇野市穂高 柏原4290-1	扇頂部	円	(南北)5 (東西)7.2	0.8～0.9	横	S10° W					須恵器・馬具

表 1-4 穂高古墳群一覧表(E 4号墳～E 19号墳・F 1号墳～F 2号墳)

古墳名	別称	地籍	立地	外部施設		内部施設				調査年月日・内容・主体者 出土遺物			
				墳形	径(m)	高(m)	形式	開口方位	平面形		断面形	長(m)	幅(m)
F 3		安曇野市穂高 柏原4325	扇頂部	円	(南北)8.5 (東西)9.8	0.9	横	S13° E					
F 4		安曇野市穂高 柏原4260	扇頂部	円	(南北)8.2 (東西)11.3	0.7	横	S20° E					
F 5		安曇野市穂高 柏原4070	扇頂部	円	(南北)10.7 (東西)13.5	1	横	S40° E	5.5	1.4			
F 6		安曇野市穂高 柏原4054	扇頂部		不明	不明							
F 7		安曇野市穂高 柏原40601	扇頂部	円	(南北)11 (東西)11.1	1.25	横	S10° E	4	1.4			
F 8		安曇野市穂高 柏原3692-1	扇頂部		不明	不明							須恵器
F 9	二つ塚	安曇野市穂高 柏原3654	扇頂部	円	17	1.32	横	S12° E					2009.8.3~11・墳丘測量調査・國學院大學
F 10	二つ塚	安曇野市穂高 柏原3654	扇頂部	円	(長)12.9 (短)11.0	1.8	横	S10° E	3.2	1			2009.8.3~11・墳丘測量調査・國學院大學
G 1	上原古墳	安曇野市穂高 7621	扇頂部										※2 須恵器・勾玉・菅玉・切子玉・小玉・金環・馬具・直刀・刀子
H 1	みまろが 耳塚	安曇野市穂高 有明3831	扇頂部		15.5	2							1986.9・墳丘測量調査・穂高町教育委員会
ちいづか 祖父が塚古墳		北安曇郡松川村 南神戸4795	扇頂部		16	2.53		S11° W	8.14	(中)2.4 (後)1.9	1.85		1982.12・石室実測調査・筑波大学 馬具・銚・直刀・土師器・勾玉・切子玉・小玉・金環
うしくぼ 牛窪古墳		北安曇郡松川村 牛窪4912	扇頂部										
まぐら 椀沢オカメ塚古墳		北安曇郡松川村 南神戸	扇頂部	円									

※1 1921年5月7日鳥居龍蔵踏査・1922年実測調査(宮坂光次)・1986年9月13日～15日実測調査(長野県埋蔵文化財センター)・1986年9月28日～10月5日発掘調査(三木弘)

※2 1930年5月24・25日発掘調査(猿田文紀)・1932年9月7日・12月8日踏査(今井真樹)・1982年12月墳丘・石室実測調査(筑波大学)・1999年1月11日～2月5日発掘調査(穂高町教育委員会)

・1970年の穂高町教育委員会による調査では、E群のうち墳丘・石室が確認できない古墳について「古墳跡E○号墳」と彫られた石柱を設置している。ここでは石柱に彫られた番号と通し番号の両方を記載した。

・今年度実施した現状確認調査で得られたデータには下線を引いて示した。

・安曇野市埋蔵文化財包蔵地図(安曇野市教育委員会編2010)では、A2・A4・A5は欠番となっている。

表 1 - 5 穂高古墳群一覧表(F 3 号墳～F 10号墳・G 1 号墳・H 1 号墳・松川村所在古墳)

第Ⅵ章 おわりにあたって

1981年以来継続して調査してきた東京都三宅島物見処遺跡を中心とした考古学実習が終了し、今年度より新たに長野県安曇野市に所在する穂高古墳群にその舞台が移された。考古学実習として古墳時代の遺跡が調査されるのは1983年の千葉県富津市の森山塚古墳以来26年ぶりのことである。

安曇野の地域では、当時本学教授を務められていた故・大場磐雄氏が1949年に安曇族の安曇野への入植について考古資料に基づき考察した論考を公表、翌年には穂高古墳群を構成する古墳のひとつであるE7号墳(狐塚2号古墳)の発掘調査を行っている。また本学の院友である桐原健氏や三木弘氏も穂高古墳群をめぐる数々の研究成果を発表されている。こうした諸先生・諸先輩方が築き上げてきた國學院大學考古学研究室の伝統・歴史を、我々は新たに受け継ぎ発展させていかねばならない。

調査は次年度以降も継続して実施が予定されており、今年度調査では国営アルプスあづみの公園内にあるF9号墳とF10号墳の墳丘測量調査を行い、径・高さや形状、状態を把握するとともに、E群・F群の現状確認調査を行って周辺古墳の情報収集と過去の調査時との残存状態の変化を確認した。

実習生のほとんどが考古学調査の経験がなく、6月・7月は考古学調査法の授業時間外にも毎週土曜日の午後を中心に勉強会と機材練習を行った。勉強会では、穂高古墳群そのものだけでなく、信州地域全体での古墳時代の特色についても調べ、基礎知識の習得に努めた。機材練習では、今年度の調査内容を考慮して測量技術の習得に重点をおいて取り組み、先輩方からは光波測距儀の実演指導もしていただいた。

実際の現地での測量調査では、要求される正確さや予期せぬ事態の発生など練習との勝手の違いに戸惑いつつも、互いに協力し声を掛け合って図面を完成させることができた。現状確認調査では、文化財破壊の現場を目の当たりにする一方で、文献の地図では確認できなかった古墳を地元の方々に案内して頂いたり、古墳にまつわるお話を聞かせて頂いたりした。住民の方々の日々の暮らしと文化財との共存の難しさ、保存への理解の大切さを身にしみて感じる事ができた。調査期間中は雨天に見舞われて半日しか作業ができなかった日も多く、対象となっていた古墳全てを調査することができなかったのが残念である。

現地での調査終了後の整理作業・報告書作製作業は、授業時と金曜日・土曜日の午後を中心に進めた。初めて調査する遺跡ということで文献資料もそろっておらず、学内の図書館・資料室、ときには学外にも足をむけて集めた。関連する自治体からは多くの文献の提供を頂いた。原稿執筆に際しては繰り返し検討会を開催し、記載内容の正確性・理解のしやすさを向上させるべく努力した。

2010年度以降の調査で墳丘にトレンチが入れられれば、今年度の何倍もの事実を得られることと思われる。それに比べれば、今回判明した事実は穂高古墳群の性格を解明する手掛かりのほんの一部でしかないだろう。しかし私たちは「第1次調査」の実習生として、「1冊目」の報告書の執筆者として次に繋げていく土台をここに作れたことを誇りに思いたい。

最後になりましたが、現地で御協力をいただいた安曇野市教育委員会をはじめとする諸機関、温かい声援と時には厳しい指導をいただいた諸先生・諸先輩方、この調査に御助力をくださいました全ての方々に心より感謝申し上げます。
(久我谷)

引用・参考文献

- 明科町教育委員会編 1991 『ほうろく屋敷遺跡』明科町の埋蔵文化財第3集
2000 『明科廃寺』明科町の埋蔵文化財第7集
2005 『潮神明宮前遺跡Ⅱ』明科町の埋蔵文化財第13集
- 秋田繁人 1997 「第1章第1節 豊科町の自然的位置と環境」『豊科町誌』豊科町誌刊行会、3-6頁
- 安曇野市教育委員会編 2006 『東小倉遺跡Ⅴ』安曇野市の埋蔵文化財第1集
2009 『三枚橋・藤塚遺跡書』安曇野市の埋蔵文化財第2集
2010 『ハツ口遺跡・三枚橋遺跡』安曇野市の埋蔵文化財第3集
2010 『安曇野市埋蔵文化財包蔵地図』
- 朝日村教育委員会編 2003 『熊久保遺跡第10次発掘調査報告書』朝日村文化財調査報告書第1集
- 梓川村教育委員会編 1978 『長野県南安曇郡梓川村荒海渡遺跡発掘調査報告書』
- 市川健夫 2005 「信州における馬産と馬文化」『信濃』第57巻第5号、信濃史学会、147-164頁
- 今井眞樹 1933 「穂高町上原の竪穴式石廓古墳」『史蹟名勝天然紀念物調査報告』第14輯、長野県・長野県教育委員会、64-66頁
- 岩崎卓也 1989 「第二章 古代社会の基礎」『長野県史』第一巻、長野県史刊行会、204-286頁
- 岩崎卓也・松尾昌彦・松村公仁 1983 「有明古墳群の再調査」『信濃』第35巻第11号、信濃史学会、32-60頁
- 岩崎長思・唐沢貞治郎 1923 「南安曇郡魏磯城窟」『史蹟名勝天然紀念物調査報告』第1輯、長野県・長野県教育委員会、84-86頁
- 上田市立信濃国分寺資料館 2005 『信濃の古代・中世の仏教文化と関係遺跡』上田市立信濃国分寺資料館
- 牛山佳幸 1989 「第四章第二節第四項 寺社政策の転換」『長野県史』第二巻、長野県史刊行会、597-614頁
1992 「貞観八年の信濃定額寺列格をめぐって(上)」『信濃』第44巻第11号、信濃史学会、1-25頁
1993 「貞観八年の信濃定額寺列格をめぐって(下)」『信濃』第45巻第2号、信濃史学会、36-51頁
- 大阪府立弥生文化博物館編 2001 『弥生クロスロード一再考・信濃の農耕社会一』大阪府立弥生文化博物館図録23
- 太田伯一郎 1923 「第二章第三節 遺跡(古墳)」『南安曇郡誌』(旧版)、南安曇郡教育會、211-231頁
- 大場磐雄 1949 「信濃国安曇族の考古学的一考察」『信濃』第1巻第1号、信濃史学会、1-7頁
- 大場磐雄・永峰光一・原 嘉藤 1963 「長野県東筑摩郡四賀村井刈遺跡調査概報」『信濃』第15巻第12号、信濃史学会、1-20頁
- 大場磐雄・原 嘉藤 1961 「長野県塩尻市柴宮発見の銅鐸」『信濃』第13巻第4号、信濃史学会、2-20頁
- 大町市教育委員会編 1980 『借馬遺跡1』
1981 『借馬遺跡2』
1982 『借馬遺跡3』大町市埋蔵文化財調査報告書第6集
1985 『借馬遺跡4』大町市埋蔵文化財調査報告書第9集
1988 『大町市の遺跡』大町市埋蔵文化財調査報告書第13集
1990 『一津遺跡』大町市埋蔵文化財調査報告書第16集
- 岡田正彦 1972 「長野県更埴市大字八幡青木遺跡発掘調査報告」『長野県考古学会誌』第14号長野県考古学会、9-21頁
- 丘中学校遺跡発掘調査団 1983 『丘中学校遺跡』塩尻市教育委員会
- 小川岳夫 2008 「中部高地における中期から後期の地域的動向」『「赤い土器のクニ」の考古学』、雄山閣、165-220頁
- 春日賢一 1921 「北安曇郡に於ける古墳」『信濃教育』第417号、信濃教育會事務所、18-22頁
- 加藤雅士 2006 「石棺墓の展開とその意義—縄文時代後期の関東甲信越」『考古学雑誌』第90巻第1号、日本考古学会、1-39頁
- 唐沢貞治郎 1925 「ぢいが塚」『史蹟名勝天然紀念物調査報告』第3輯、長野県・長野県教育委員会、310・311頁
1925 「陵塚(みさゞ塚)」『史蹟名勝天然紀念物調査報告』第3輯、長野県・長野県教育委員会、312・313頁
- 川崎 保 2005 「長野県山の神遺跡」『縄文ランドスケープ』アム・プロモーション、167-177頁
- 川西清光・松尾昌彦 1984 「穂高古墳群」『長野県史』考古資料編全1巻(3)主要遺跡(中信)、長野県史刊行会、219-230頁
- 木船 清 2004 「第1章1 三郷村の地勢」『三郷村誌Ⅱ』第一巻自然編、三郷村誌刊行会、3頁
- 桐原 健 1962 「長野県松本市中山古墳群出土の土器様相—柏木古墳出土土器を中心として」『信濃』第14巻第11号、信濃史学会、30-41頁

- 1991 「第二章第三節古墳時代」『穂高町誌』第2巻(歴史編上・民俗編)、穂高町誌刊行会、57-99頁
- 1994 「古代安曇野に観る漁撈民の問題」『信濃』第46巻第10号、信濃史学会、38-48頁
- 1996 「第一章第三節 奈良・平安時代」『松本市史』第二巻、松本市、272-298頁
- 1996 「第二章第一節 弘法山古墳の時代」『松本市史』第二巻、松本市、300-313頁
- 1996 「第二章第二節 古墳文化の発展」『松本市史』第二巻、松本市、314-325頁
- 2002 「明科廃寺が提起する問題」『信濃』第54巻第12号、信濃史学会、55-61頁
- 2004 「信濃の東山道新駅にかかわる推論」『信濃』第56巻第10号、信濃史学会、40-49頁
- 2006 「信濃の海神族」『信濃』第58巻第1号、信濃史学会、1-10頁
- 黒坂周平 1989 「第三章第六節三項 信濃国分寺」『長野県史』第二巻、長野県史刊行会、543-555頁
- 櫛原功一 1990 「瓦」『天狗沢瓦窯跡発掘調査報告書』敷島町教育委員会
- 工業技術院地質調査所編 1989 「高山」『20万分の1地質図編』
- 1998 「長野」『20万分の1地質図編』
- 弘法山古墳発掘調査報告書刊行委員会編 1978 『弘法山古墳 長野県松本市弘法山古墳調査報告』松本市教育委員会
- 小河深美 1991 「第3章 陸水と土壌」『穂高町誌』自然編、穂高町誌編纂委員会、51-87頁
- 小林計一郎 1989 「第四章第三節四項 信濃布の登場」『長野県史』第二巻、長野県史刊行会、655-665頁
- 小林達雄 2008 「縄文土器様式編年表」『総覧縄文土器』アム・プロモーション
- 小林康男・小松 学編 2002 『松本平の土偶』塩尻市平出博物館
- 小松 学 2006 「縄文時代の平出遺跡」『平出博物館紀要』第23集、塩尻市立平出博物館、13-47頁
- 猿田文紀 1931 「南安曇郡穂高町上原区古墳發掘に就て」『信濃考古學會誌』第2年第5・6輯、信濃考古學會、168-171頁
- 猿田文紀 1933 「南安曇郡穂高町上原区古墳發掘に就て」『史蹟名勝天然紀念物調査報告』第14輯、長野県・長野県教育委員会、66-81頁
- 産業技術総合研究所地質調査総合研究センター編 2009 『20万分の1日本シームレス地質図DVD版 数値地質図G-16』
- 塩尻市教育委員会編 1986 『埴原遺跡—長野県塩尻市埴原遺跡発掘調査概報』
- 1988 『一般国道20号(塩尻バイパス)改築工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 1998 『下境沢遺跡』
- 2000 『五日市場遺跡』
- 2005 『史跡平出遺跡』
- 2007 『史跡平出遺跡』
- 式内社研究会編 1986 『式内社調査報告』第13巻東山道2、皇学館大学出版部
- 自然観察資料作成委員会 1983 『自然観察資料集(地形・地質編) 松本平のおいたちをさぐる』松本市教育会・東筑摩塩尻教育会・南安曇教育会・北安曇教育会
- 篠崎健一郎 1985 「縄文時代の変遷」『大町市史』第二巻原始・古代・中世、大町市、22-58頁
- 舅屋敷遺跡発掘調査団編 1982 『舅屋敷』塩尻市教育委員会
- 鷹野秀雄 1890 「信濃有明村ノ古墳」『東京人類學會雜誌』第5巻第52號、東京人類學會、317-319頁
- 谷口康浩 1998 「土偶型式の系統と土器様式—勝坂系土偶伝統と中期土器様式との関係—」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集』2、勉誠社、399-370頁
- 土口将軍塚古墳調査会編 1987 『長野県史跡土口将軍塚古墳』長野市教育委員会・更埴市教育委員会
- 鳥羽嘉彦 2010 「松本平南部における巨大縄文集落の形成」『平出博物館紀要』第27集、塩尻市立平出博物館、15-29頁
- 鳥居龍蔵 1925 「豊科町より」『有史以前の跡を尋ねて』雄山閣、126-199頁
- 直井雅尚 1996 「第二章第四節 ムラの生活」『松本市史』第2巻、松本市、342-370頁
- 中島豊晴 1976 「穂高町塚原F1号墳調査概報」『長野県考古学会誌』25号、長野県考古学会、55-57頁
- 中田令夫 1956 「第3篇第2章 扇状地」『南安曇郡誌』第1巻、南安曇郡誌改訂編纂会、175-208頁
- 長野県編 1936 『長野縣町村誌』南信篇 長野県
- 1981 「南安曇郡 穂高町」『長野県史』考古資料編全1巻(1)遺跡地名表、長野県史刊行会、288-293頁
- 長野県埋蔵文化財センター編 1988 『中央自動車長野県埋蔵文化財発掘調査報告書2—塩尻市内その1—本文編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書2
- 1989 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3—塩尻市内その2—吉田川西遺跡 本文編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書3
- 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書4—松本市内その1—総論編』長野県埋蔵文化財セン

- ター発掘調査報告書 4
- 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 7—松本市内その 4—南栗遺跡 本文編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 7
- 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 8—松本市内その 5—北栗遺跡 本文編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 8
- 1990 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書 9—松本市内その 6—三の宮遺跡 本文編』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 9
- 1993 『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11—明科町内—北村遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14
- 1997 『国営アルプスあづみの公園埋蔵文化財発掘調査報告書 1 穂高古墳群—近世集積遺構の調査』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書23
- 2003 『国営アルプスあづみの公園埋蔵文化財発掘調査報告書 2—大町市内その 1—山の神遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書60
- 中村耕作 2008 「葬送儀礼における土器形式の選択と社会的カテゴリ—縄文時代後期関東・中部地方の土器副葬と土器被覆葬」『物質文化』第85号、物質文化研究会、1-31頁
- 2010 「釣手土器の展開過程」『史葉』第3号、加藤建設株式会社、21-46頁
- 仲野 浩 1972 「奈良時代における定額寺」『続日本古代史論集』中巻、吉川弘文館、213-228頁
- 仁科良夫 1991 「第2章 地形と地質」『穂高町誌』自然編、穂高町誌編纂委員会、11-26頁
- 波田町教育委員会編 1980 『長野県東筑摩郡波田町葦原遺跡緊急発掘調査報告書』波田町
- 原 明芳 1996 「第三章第一節 律令体制成立期の社会のうごき」『松本市史』第2巻、松本市、372-406頁
- 原 嘉藤 1955 「長野県東筑摩郡明科町明科廃寺について」『信濃』第7巻第7号、信濃郷土研究会、50-64頁
- 1983 「中山36号墳」『長野県史』考古資料編全1巻(3)主要遺跡(中信)、長野県史刊行会、259-261頁
- 原 嘉藤・小松 虔 1972 「長野県松本市中山36号墳」『信濃』第24巻第4号、信濃史学会、61-76頁
- 樋口昇一 1995 「塩尻の原始・古代」『塩尻市史』第二巻歴史、塩尻市、14-21頁
- 樋口昇一・桐原健・中川治雄 1986 『長野県の歴史シリーズ① 図説・松本の歴史 上』郷土出版社
- 平林潤郎 1988 「古代の松川村」『松川村誌』歴史編、長野県松川村誌刊行会、59-84頁
- 平林照雄 1984 「第1編第4章 中央部低地(松本盆地)」『大町市史』第1巻自然環境、大町市史編纂委員会、225-254頁
- 福島正樹 1989 「第三章第三節 律令時代の租税」『長野県史』第二巻、長野県史刊行会、430-461頁
- 藤沢宗平 1968 「第一編第四章 古墳文化とそれ以降の文化」『南安曇郡誌』第2巻上、南安曇郡誌改訂編纂会、90-140頁
- 穂高町・穂高町教育委員会編 1989 『穂高町の古墳群とその人々』穂高町・穂高町教育委員会
- 穂高町教育委員会編 1970 『穂高町の古墳』柳沢書苑
- 1972 『離山遺跡』
- 1987 『穂高町矢原遺跡群(馬場街道遺跡)』
- 2001 『穂高町一本木・神の木・宋徳寺・南原遺跡・穂高沢水系による開発沢、上原古墳』
- 増田謙吾 1901 「信濃國有明村古墳所在地瞥見録」『東京人類學會雜誌』第16巻第181号、東京人類學會、285-287頁
- 松川村教育委員会 1968 『有明山社』
- 松崎岩夫 1988 「「信濃国筑摩郡山家郷火頭椋椅部逆養錢六百文」について」『信濃』第40巻9号、信濃史学会、66-77頁
- 松本市教育委員会編 1972 『長野県松本市女鳥羽川遺跡緊急発掘調査報告書』
- 1986 『松本市宮渕本村遺跡(本文編)』松本市文化財調査報告No.45
- 1987 『松本市宮渕本村遺跡Ⅱ』松本市文化財調査報告No.52
- 1988 『松本市向畑遺跡Ⅰ』松本市文化財調査報告No.60
- 1989 『大村遺跡 古瓦を出土する平安時代集落址の発掘調査概報』松本市教育委員会
- 1989 『松本市千鹿頭北遺跡』松本市文化財調査報告No.69
- 1989 『松本市宮渕本村遺跡Ⅲ』松本市文化財調査報告No.77
- 1990 『松本市坪ノ内遺跡』松本市文化財調査報告No.80
- 1990 『松本市小原遺跡』松本市文化財調査報告No.86
- 1991 『小池遺跡』
- 1993 『松本市山影遺跡』松本市文化財調査報告No.100
- 1993 『松本市針塚遺跡Ⅱ』松本市文化財調査報告No.102

- 1993 『松本市下原遺跡Ⅱ』松本市文化財調査報告No.106
- 1993 『松本市小原遺跡Ⅱ』松本市文化財調査報告No.107
- 1993 『松本市百瀬遺跡Ⅱ』松本市文化財調査報告No.108
- 1993 『弘法山古墳出土遺物の再整理』松本市文化財調査報告No.111
- 1994 『松本市平田本郷遺跡』松本市文化財調査報告No.113
- 1994 『松本市出川南遺跡Ⅳ・平田里古墳群』松本市文化財調査報告No.115
- 1994 『松本市高宮遺跡』松本市文化財調査報告No.116
- 1995 『松本市平田本郷遺跡Ⅱ』松本市文化財調査報告No.119
- 1996 『松本市小原遺跡Ⅲ』松本市文化財調査報告No.123
- 1997 『小池遺跡Ⅱ・一ツ家遺跡』松本市文化財調査報告No.126
- 1997 『エリ穴遺跡』松本市文化財調査報告No.127
- 1998 『長野県松本市境窪遺跡・川西開田遺跡Ⅰ・Ⅱ』松本市文化財調査報告No.130
- 1999 『出川西遺跡Ⅵ』松本市文化財調査報告No.135
- 1999 『松本市平田本郷遺跡Ⅲ』松本市文化財調査報告No.138
- 1999 『出川南遺跡5』松本市文化財調査報告書No.139
- 2000 『出川南遺跡8』松本市文化財調査報告No.157
- 2001 『松本市百瀬遺跡Ⅳ』松本市文化財調査報告No.151
- 2002 『出川南遺跡12』松本市文化財調査報告No.158
- 2002 『川西開田遺跡Ⅲ・Ⅳ』松本市文化財調査報告No.162
- 2003 『松本市平田本郷遺跡Ⅳ・Ⅴ』松本市文化財調査報告No.166
- 2003 『中山古墳群・鍬形原遺跡・鍬形原砦址』松本市文化財調査報告No.168
- 2003 『桜ヶ丘古墳—再整理報告書—』松本市文化財調査報告No.170
- 2008 『中山古墳群14・15 カニホリ東・西遺跡』松本市文化財調査報告No.196
- 2009 『出川南遺跡：第14次発掘調査報告書』松本市文化財調査報告書No.198
- 松本市教育委員会文化財保護課編 2005 『松本平の発掘を語る。』松本市教育委員会
- 三木 弘 1990 「魏石鬼窟古墳を利用した修験道」『穂高町郷土資料館』第12号
- 1991 「有明古墳群の再検討(1)」『信濃』第43巻第12号、信濃史学会、14-30頁
- 2006 「有明古墳群の再検討(2)—魏磯城窟古墳の再考を通じて—」『長野県考古学会誌』118号、長野県考古学会、179-193頁
- 三木 弘・寺島俊郎・西山克己 1987 「長野県南安曇郡穂高町所在魏磯城窟古墳について」『信濃』第39巻第5号、信濃史学会、59-83頁
- 宮坂亮 編 1923 『有明村誌』有明村役場
- 宮坂光次 1922 「信州南安曇郡有明村ドルメン類似の古墳に就いて」『人類學雜誌』第37巻第9号、東京人類學會、299-304頁
- 宮地直一 1949 『穂高神社史』穂高神社
- 百瀬新治 1991 「第二編第一章 原始・古代」『堀金村誌』上巻(自然・歴史)、堀金村誌刊行会、265-350頁
- 森將軍塚古墳発掘調査団編 1992 『史跡森將軍塚古墳—保存整備事業発掘調査報告書—』更埴市教育委員会
- 森田 悌 1986 「定額寺と信濃」『信濃』第38巻9号、25-41頁
- 1988 『日本古代の政治と地方』高科書店
- 森本六爾 1929 『川柳村將軍塚の研究』岡書院
- 山口英男 1989 「第四章第三節第三項 信濃の牧」『長野県史』第二巻、長野県史刊行会、640-665頁
- 山形村教育委員会編 1987 『殿村遺跡』山形村遺跡発掘調査報告書6集
- 2001 『境窪遺跡Ⅱ』山形村遺跡発掘調査報告書第10集
- 2002 『三夜塚遺跡Ⅲ』山形村遺跡発掘調査報告書第12集
- 2009 『下原遺跡・三夜塚遺跡Ⅳ』山形村遺跡発掘調査報告書第15集
- 山下泰永 1988 「穂高町の古墳群とその人々」『穂高町郷土資料館』第10号
- 横内文人 2008 「第1章1 明科町の位置」『明科町史』自然編、安曇野市教育委員会、3-4頁
- 上原遺跡調査会編 1957 『上原』長野県埋蔵文化財発掘調査報告書第2

写真図版





1 F 9号墳・F 10号墳 遠景(西側展望台から)



2 F 9号墳・F 10号墳 遠景(北から)

図版 2



1 F 9号墳 除草前(北から)



2 F 9号墳 除草後(北から)



1 F 9号墳 除草前(西から)



2 F 9号墳 除草後(西から)

図版 4



1 F 9号墳 墳丘残存状況(東から)



2 F 9号墳 石室残存状況・羨道部(南から)



1 F 10号墳 除草前(北から)



2 F 10号墳 除草後(北から)

図版 6



1 F 10号墳 墳丘残存状況(北西から)



2 F 10号墳 墳丘残存状況(西から)



1 F 10号墳 墳丘残存状況(南西から①)



2 F 10号墳 墳丘残存状況(南西から②)

図版 8



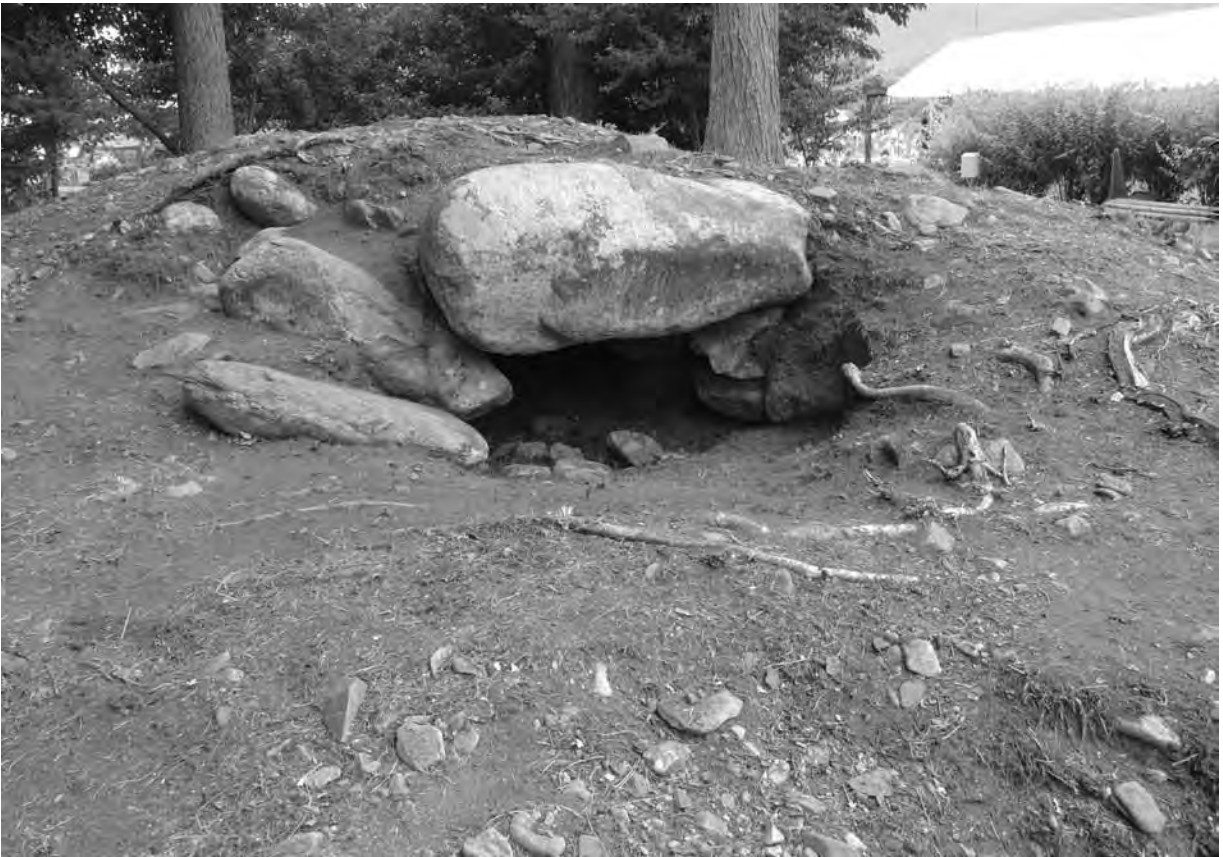
1 F 10号墳 墳丘残存状況(南東から)



2 F 10号墳 墳丘残存状況(東から)



1 F 10号墳 墳丘残存状況(北東から)



2 F 10号墳 石室残存状況(北から)

図版10



1 F 10号墳 石室・羨道部残存状況(南から)



2 F 10号墳 石室・羨道部残存状況(西から)



1 E 1号墳(西牧塚) 墳丘残存状況(南から)



2 E 1号墳(西牧塚) 墳丘残存状況(北から)

図版12



1 E 9号墳(前田塚) 現状(東から)



2 E 9号墳(前田塚) 現状(南東から)



1 E 10号墳(寺島塚) 墳丘・石材残存状況(南東から)



2 E 10号墳(寺島塚) 墳丘・石材残存状況(南西から)

図版14



1 E 11号墳(神谷塚) 現状(南から)



2 E 11号墳(神谷塚) 現状(北から)



1 F 1号墳(一本杉古墳) 現状(南から)



2 1950年頃のF 1号墳(一本杉古墳) (穂高町教育委員会編1970)

図版16



1 F 2号墳 墳丘残存状況(東から)



2 F 2号墳 墳丘残存状況(南から)



1 F 3号墳 墳丘残存状況(南から)



2 F 3号墳 石材残存状況(南から)

図版18



1 F 4号墳 墳丘残存状況(東から)



2 F 5号墳～F 7号墳の位置関係



1 F 5号墳 墳丘残存状況(南から)



2 F 5号墳 墳丘残存状況(東から)

図版20



1 F 6号墳 現状(南から)



2 F 6号墳 石室残存状況(南から)



1 F 7号墳 墳丘残存状況(北から)



2 F 7号墳 墳丘残存状況(西から)

図版22



1 F 8号墳 現状(南から)



2 F 8号墳 現状(東から)

発掘調査参加者・関係者一覧

考古学実習生

秋山裕志・阿曇公久・伊藤 愛・加納大典・神永憲人・久我谷溪太・後藤 航・小林裕樹・小宮美紀・
紺谷佳奈江・齋藤有平・坂才 瞳・佐瀬裕太・竹内竜巳・鳴海由希・野田梨佳・長谷川千絵・長谷部太陽・
畠山伸彦・矢花真紀

発掘特別参加者

上妻大樹・浅海莉絵・岩井美樹・上田 翼・大宮宏和・加藤大二郎・蔵野泰洋・斎藤 唯・佐藤直紀・鈴木孝規・
徳江 基・中島金太郎・中橋辰也・林友里恵・山口 晃(以上國學院大學学生)・朝倉一貴・有福小百合・
石村亀志雄・江戸邦之・佐藤周平・新原佑典・田島太良・中島大輔・成田 裕(以上國學院大學大学院生)

発掘調査機関・協力者

国土交通省関東地方整備局国営アルプスあづみの公園事務所・
財団法人公園緑地管理財団アルプスあづみの公園管理センター・長野県教育委員会・安曇野市教育委員会・
安曇野市明科郷土資料館・安曇野市穂高郷土資料館・安曇野市鐘の鳴る丘集会所・長野県立歴史館・
松本市教育委員会・松本市立考古博物館・大町市教育委員会・塩尻市教育委員会・山形村教育委員会・
松川町教育委員会・穂高神社・渋谷氷川神社・有限会社メディアオ

地権者の方々

植田 真・内川隆志・内田利幸・内堀 団・太田圭郁・加藤里美・桐原 健・久保田健太郎・多田博志・辻井俊博・
土屋和章・富田 武・那須野雅好・古谷 毅・山岸美夫・山田真一

見学者

石橋 宏・植野浩三・大森信宏・加藤夏姫・加藤元康・加藤ユーリア・加藤理香・佐藤尚子・田中大輔・
谷 和隆・谷口 萌・寺内隆夫・中島将太・成田美葵子・西 香子・野尻義敬・数下詩乃

報告書抄録

ふりがな	ながのけんあづみのし ほたかこふんぐん 2009ねんどそくりょうちょうさ・げんじょうかくにんちょうさほうこくしょ							
書名	長野県安曇野市 穂高古墳群 2009年度測量調査・現状確認調査報告書							
シリーズ名	國學院大學文学部考古学実習報告							
シリーズ番号	第44集							
編著者名	(編集)吉田恵二・中村耕作 (著者)秋山裕志 伊藤 愛 加納大典 久我谷溪太 小林裕樹 小宮美紀 紺谷佳奈江 齋藤有平 坂才 瞳 佐瀬裕太 鳴海由希 長谷川千絵 畠山伸彦 矢花真紀							
編集機関	國學院大學文学部考古学研究室							
所在地	〒150-8440 東京都渋谷区東 4-10-28 TEL03(5466)0248							
発行年月日	2010(平成22)年11月30日							
遺跡名	所在地	市町村番号	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ほたかこふんぐん 穂高古墳群 F9号墳 F10号墳 (二つ塚)	ながのけんあづみのし 長野県安曇野市 ほたかかわぼら 穂高柏原3654	20462	2-F9 (穂高古墳78) 2-F10 (穂高古墳79)	36° 19' 08"	137° 50' 29"	20090803 ~ 20090812	-	学術調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺物			特記事項		
穂高古墳群	古墳	古墳 後期	F9号墳：長径約13m、高さ約1.7mの円墳。 F10号墳：長径約12.9m、高さ約1.8mの円墳。			烏川扇状地の南側に位置するF群の中で最も上位に位置し、保存状況良好な二つ塚と通称される2基。		
要約								
87基以上からなる穂高古墳群は、長野市大室古墳群や松本市中山古墳群とともに長野県を代表する群集墳の一つである。明治時代以降の報告以来、何度か調査が行われていたが、まとまった学術調査が行われていないため、國學院大學考古学調査法(考古学実習)の一環として学術調査を開始した。本年度は比較的保存状態が良好なF9号墳・F10号墳の墳丘測量調査と周辺の支群であるE群・F群の現状確認調査として周辺環境、墳丘規模・石室の確認などを行った。								

文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権(発行)者の承諾なく、この報告書を複製して利用できます。なお、利用にあたっては出典を明記してください。

市町村番号は20220の誤りです

國學院大學文学部考古学実習報告 第44集

長野県安曇野市

穂高古墳群

2009年度 墳丘測量調査・現状確認調査報告書

2010年11月30日 発行

編集 吉田 恵二

中村 耕作

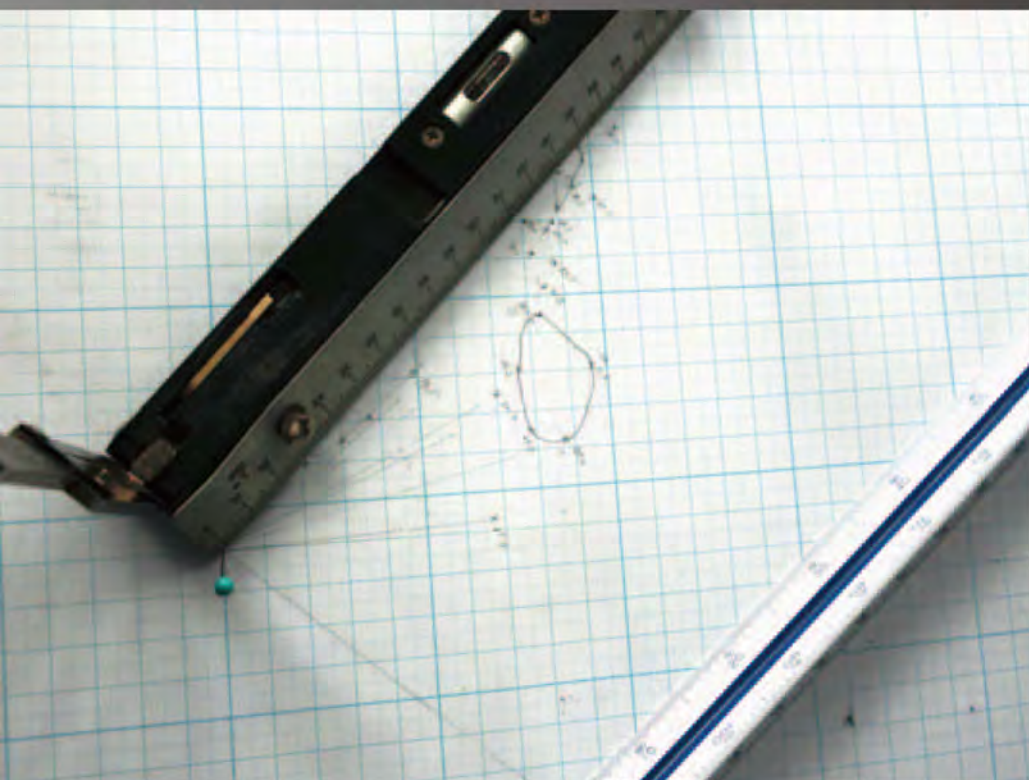
発行 國學院大學文学部考古学研究室

〒150-8440 東京都渋谷区東 4 - 10 - 28

電話 03 (5466) 0248

印刷 よしみ工産株式会社

Archaeological Research
at
the HOTAKA TUMULI



November , 2010

Department of Archaeology,
Faculty of Letters,
Kokugakuin University

4-10-28 Higashi, Shibuya-ku, Tokyo, JAPAN 150-8440